

ナジェージダ・プトウシキナ

有料道路「パラダイス」を吹き荒れる新年の吹雪

二幕劇

登場人物：

エゴール・ゲオルギエヴィチ・チャシェフーおよそ75歳、プラス1～2歳。90年代までは中堅階級のノーメンクラトゥーラ（特権階級）の一員で、2000年代半ばまでかつての地位を何とか維持しようと努力し、それはある程度成功していた。ここ5年は年金生活だが、必要な人脈は断ち切っていない。

企業のメルセデス・ベンツの運転手

アンナ・カラムジナータクシー運転手（中国製SUV）

ファティマ・ガミドヴナ・アラノヴァー産婦人科医、45歳、クリニック「トロイツァ」の産科部長

シャパー35歳から45歳の間、ガソリンスタンド「ルソイル」のオペレーター兼、売店の店員兼、ミニマーケットの販売員

スヴェトーニイ・ブボラーシャパの夫、年齢不詳だが妻よりは若い、ドムラ奏者

作者注記：上演にあたり、劇のタイトルを変更する場合は作者の同意が必要です。タイトルが長すぎる、または作者が考えるほどスタイリッシュではないと誰かが思う場合の代替案として、以下のいずれかを使用す

ることができます：「新年の吹雪」または「パラダイスへの有料道路」。

モスクワ 2026年

第一幕

2025年12月31日。夕方早い時間。メルセデス車内。男二人：運転手と乗客。乗客のエゴール・ゲオルギエヴィチは、後部座席の右側（運転手の後ろ）に座っている。彼は左手で、地味な色合い（汚れた白と濃いグレーの縞模様）の大きなバッグを支えているのか、押さえているのか、あるいは管理しているのか、といった様子だ。車はモスクワ近郊の高速道路を走っている。曇天。時折、対向車のヘッドライトがちらつく。まばらな雪の結晶が舞っている。

ナビゲーター（アリサの声）：ルートを設定しました。200メートル先、有料道路13ベレジナです。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（運転手に）：何分くらいで戻れますかね？

運転手：ナビでは55分です。

トランスポンダーがピッとなる。

運転手が速度を落とし、ほぼ停止する。バーが上がり、メルセデスがバーの下を通過し、再び速度を上げる。運転手がラジオをつける。

無名の女性歌手の甘い声（注意：音楽はアナトーリイ・レーピン、詩はウラジーミル・リフシッツ；両者の著作権についてはロシア著作権協会に問い合わせること）：

...五分間、喧嘩している人も仲直りを五分間、五分間 厳しく言えば、
解決できる この五分間でも 多くのことができる

五分間、五分間 やがて時計の鐘が鳴る...

男たちはしばらく黙り、何かを聴いているようだ。

運転手（ラジオの音量を下げて）：もう人々は食卓をチラ見してる頃でしょうな。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：そうだな...

運転手：我が家では、もう6時ごろから年越しの準備を始めるんです。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：いつもご自宅でお祝いされるんですか？

運転手：ええ... 軍隊にいた2年間を除いてはね。最初は両親と、それから妻と両親と、妻の友人と（以下、まるで勲章を列举するような口調で親戚を列举する）、舅と姑と。義兄と、義妹と... もちろん、義理の兄弟や義理の姉妹、甥っ子、兄弟、子供たちと... 子供は4人いるんです。そして今年は初孫とも。今日、やっとお披露目されるんです。家族に紹介される、というわけです。初対面です。娘が4人なので、ようやく男の子が生まれました。孫です。ああ、それと婿たちもちろん。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：壮観なイコノスタシス（聖像屏）だな。

運転手： 子供や甥っ子たちが世界中に散らばっていて、新年にしか集まらないんですよ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： アパートに全員収まるんですか？

運転手： いや、今年はアパートなんです。私のせいでね。この臨時の仕事が入って、朝電話があったんです。余計な収入は悪くないし、家族と相談して、断らないことにしたんです。そうでなければ、もう別荘でやってたでしょうね。300平方メートルあるんで、みんな十分くつろげるんですよ。（間を置いて） あなたはどこでお祝いするんです？

エゴール・ゲオルギエヴィチ： その時々でね。

運転手がラジオの音量を上げる。車内にはBetsyとDed Mによるポップスが流れる：

新年— 新年— 新年— 新年— 新年にサンタがプレゼントをくれた 彼に聞いたんだ「どうして鼻が赤いの？」って なんでぶつぶつ言うの？ 髪の毛の匂いが また猫の尻尾に飛んでいく 年もサンタも 通りは吹雪だよ、スヴェトウーシク、僕らは南にいるわけじゃない（ああ） もう温まったよ...

（この曲は、同様に下品な別の曲に差し替えても構わない）。

運転手が曲の途中で消す。

運転手： はあ...

エゴール・ゲオルギエヴィチ： ああ。

運転手： ソビエト連邦はみんな批判するけど、未だにいい歌を作れないんだからな。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： まあ、何て言ったらいいか。

運転手： いや、そう単純じゃないですよ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 単純だ、単純じゃない... まあな。でもどこだっけ...

運転手（気さくに）： うちの若者たちは食卓で歌うんですよ（突然、美しいテノールで）「ザバイカルの荒野の草原で、山で金を掘る場所で、放浪者は運命を呪いながら、肩に袋を担いで引きずっていた...」（なぜか誇らしげに）ちなみに、我が家はザバイカル地方なんで、もうとっくに鐘の音を聴いてますからね。そう考えると、ロシアは偉大な国ですよ。（間を置いて）それと、もし考えてみて、考察するなら... 昔は食卓に座ってストーブを見てたもんです。まあ、それはそれで居心地はいいけど、やっぱりテレビの方がいい。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 別荘にはストーブもあるんじゃないですか。

運転手： 失礼だな。ボイラーですよ...（間を置いて）おや、前がすごく吹雪いてるな。今まさに吹雪の中に突入しそうだ。

そして、まるでその言葉を裏付けるかのように、車は別の気象状況、雪の渦の中に突入する。運転手は少し速度を落とす。

運転手： ゆっくり行きましょう。遅れてはいませんよね？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：遅れてない。

運転手：ナビが50分って表示してますね。今のところ20分くらいロスしてる計算です。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：致命的じゃない。

運転手：現地で待つとしたら... どのくらい見込んでます？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：うーん... 私次第じゃない。用事が済めば1時間で十分だ。だが... もちろん、6時間くらい引き留められることもあった。状況次第だな。

運転手が口笛を吹く。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：知らない人に会いに行くんだ。あちらがどう決めるか見当もつかない。でも、あなたは時間給でしょう？ 理論上は長引けば長引くほどあなたにとっては良いはずだ。

運転手：新年でなければね。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：まあ、誰も引き延ばそうとはしないだろう。

運転手：うまく切り上げられるといいんですが。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：期待を裏切らないようにするよ。片付ける。長引くようなら、あなたを引き止めはしない。タクシーで戻るから。

運転手：それにしても、新年は素晴らしい祝日ですよ。世界中のどんな祝日より、一番楽しくて軽やかな祝日です！

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 同意する。

突然、右側から別の大型車が割り込んでくる。ヘッドライトがメルセデスの窓を照らし、タイヤの悲鳴とブレーキ音、クラクションが鳴り響く。メルセデスは車体を回転させ、新たに現れた車に対して左側面を向ける。二台の車は一緒に回転し、メルセデスは左後部をコンクリートのガードレールにぶつける。運転手の悪態が聞こえる。そして瞬時に、運転手も乗客もエアバッグに押しつぶされる。そして静寂。エアバッグがゆっくりと萎み始める。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： バッグは？ バッグはどこだ？（慎重に左へずれる） バッグ？（まるでバッグが返事をすることを期待するかのように、不安そうに） あった（明らかに安堵して）。

その後、運転手の方へ手を伸ばす。運転手は動かない。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 大丈夫か？（少し声を大きくして） そちらは大丈夫ですか？（間を置いて） 私の声が聞こえますか？

運転手： 生きてるみたいです、それをおっしゃってるなら。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： エアバッグで脳震盪は？

運転手： エアバッグはともかく... 足が... 片方がすごく痛い... もう片方は挟まってる。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 電話...（電話を探す） あった！（電話をいじる）

フリーズした...（運転手に） 近くに電話は？

運転手： 見えません。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： どこに置いた？

運転手： マグネットホルダーに。飛んだ！

エゴール・ゲオルギエヴィチ（運転手の電話について）： ああ、あった！（運転手に）使ってもいいですか？

運転手： どうぞ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 警察は何番だっけ？

運転手（明らかに激しい痛みをこらえて）： **102**です。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： そうだ。（電話に向かって）警察ですか？ 新年おめでとうございます。事故です。有料道路**13**ベレジナです。どの辺りだ？

運転手（苦しそうに）： 入口から**15**キロくらいです。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（電話に向かって）： 有料道路の入口から約**15**キロの地点です。（短い間の後）衝突事故です。メルセデスの運転手は生きていますが、怪我をしています。もう一台の車については不明です。救急車はそちらで手配してもらえますか？（運転手に）**10**分くらいで来るでしょう、もっと早いかもしれません。持ちこたえられますか？

運転手（苦しそうに）： ご心配なく。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 警察は今は何の役にも立たない。

運転手： わかってます。でも、証人として呼ばれるかもしれません。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 呼ばれたら行くよ。でも今は無理だ。電話を返す。さあ、座席に置くよ。（電話を前の助手席に置く；自分の電話を再びいじる） 動いた！ よし。タクシーが2分で来る（車から出ようとし始める）。

運転手： あの運転手がどうなったか見たほうがいいですよ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： もちろん、もちろん。

エゴール・ゲオルギエヴィチはバッグを持って車から出る。バッグが彼にとって重いことがわかる。もう一台の車に近づく。電話のライトで窓越しに照らし、次に窓を叩く。

すぐ近くでヘッドライトとクラクションの音がする。振り返り、音の方へ向かう。途中でメルセデスの右前ドアを少し開ける。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（運転手に）： タクシーが来たよ。あの運転手は静かだ。いずれにせよ、僕にできることは何もない。

運転手： わかってます。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（ためらいながら）： じゃあ... 良いお年を。

運転手： こちらこそ！

エゴール・ゲオルギエヴィチ（ためらいながら）： 長居はできない。警察との接触は望ましくない。一切ね。

運転手： わかってます。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（弁解するような口調で）：警察は今、ある意味で大惨事なんだ。

運転手：わかってます。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：じゃあ...あなたが望んだ通り、家族と新年を迎えられることを祈ってるよ。

運転手：あなたも逃さないでください。

エゴール・ゲオルギエヴィチはタクシーへと戻る。中に入り、メルセデスと同じ位置に座る。重いバッグをやや不器用に扱う。同じように左側に置き、同じように寄りかかる。SUVのハンドルを握るのは、美しいファーコートを着た女性だ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（運転手を見ずに）：なぜ止まっている？

アンナ（非常に丁寧で親しみやすく）：こんにちは！私はアンナです。良いお年を！

エゴール・ゲオルギエヴィチは電話を見て返事をしない。

アンナ：そのバッグ、トランクにお入れしましょうか？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：いいえ。

アンナ：メルセデスに何があったんですか？（車を発進させる）

エゴール・ゲオルギエヴィチ：すみません（連絡先を押す） サッヴァ・ニキーチチ？ ええと、こういうことでして。事故に遭いました。原則的には、全員生きています... 私は運転手を残して警察と救急車を待たせ、自分はもうタクシーの中です。何かコメントはありますか？ ええ、そ

うです...わかりました...もちろん...経過は報告します。私は大丈夫です。

アンナ（沈黙を破って）：吹雪ですね...

エゴール・ゲオルギエヴィチ：ええ。

アンナ：視界が悪い。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：ええ。

アンナ：時速70キロで走ってます。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：ふん... 90とか100は無理ですか？

アンナ：お急ぎですか？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：なぜロシア人は質問に答えるのが嫌いなんだ？

アンナ（イライラせずに）：吹雪です！

エゴール・ゲオルギエヴィチ（不満そうな口調で）：それでも、私の質問に答えていただけませんか？

アンナ：どうぞ。お答えします。時速70キロ以上は危険です。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：あとどれくらいですか？

アンナ（間を置いて）：ナビがダメで、インターネットもありません。またあなたの質問にお答えできません、すみません。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（同じ不満そうな口調で）：運転歴は？

アンナ： 18歳からです。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： タクシーは何年？

アンナ： もうすぐ40年です。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： なるほど（彼の頭にそれが届く） 何年って？

アンナ： ええ、その通りです（声に笑みが感じられる） その数字は繰り返したくないわ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： では、おいくつなんです？

アンナ： 本当の女性は、自分の年齢とダイヤモンドの値段を決して言わないものです。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： わかりました。（声に笑みが一瞬浮かんだ） ずっとお若く見えます。

アンナ（笑いながら）： 何よりも？

エゴール・ゲオルギエヴィチ： ええと... あー...（答えが見つからない）
全般的に、より若く...

アンナ： ありがとう。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： それで、タクシーの仕事に満足してるんですか？

アンナ（間を置いて）： 私は道が好きなの。ちなみに、タクシー会社では私の写真が荣誉掲示板に貼られてるのよ。もう20年くらいね。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（困惑して）： そうなんですか！ おめでとうございます。

アンナ（まったく真面目に）： ありがとう。あなたは何をされているんですか？

エゴール・ゲオルギエヴィチ（明らかに直接の回答を避けて）： ええと、今まさにパラダイスへ向かっているところです...

エゴール・ゲオルギエヴィチ： キプリング。子供の頃から大好きだ。

アンナ： 私も。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（間を置いて）： 吹雪は緊張するな。

アンナ： 吹雪... 不思議なものね... 吹雪の中では、普通ではないこと、サプライズが起こるものよ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 今日の吹雪のサプライズは、私にとってはもう十分だといいいんだが。

アンナが突然急ブレーキをかける。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（前に揺れる）： またか？！

アンナ： 見て！ 前を見て！

彼らの車に向かって、よたよたと走りながら、赤い服を着た人影が急いでいる。片手に大きなバッグを持ち、もう一方の手を頭上で振っている。夕闇の中で、その人影は異常に背が高く幅広に見える。そして街灯のそばで、まるで多数の白い動くピクセルからなる巨大な影を落としている。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：迂回しろ！

アンナ：誰かが助けを必要としているみたい。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（鋭く）：誰かが助けを必要としてるように見えるのは、夜の空っぽの高速道路だってことだ。ドアをロックしろ。

アンナ：賭けてみる？！

人影はもう左前のドアのところにいて、窓を叩いている。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：賭ける必要はない！

アンナ：ちょっとだけ窓を下ろして話を聞いただけよ。

ファティマ：ヨウ素とアルコール。それからバッグからシート、おくるみ、毛布、帽子を出して。

アンナ（実行する）：探してる、探してる... あった！（物を取り出す）

ファティマ（その間ずっと体を動かして楽な姿勢を探している）：バッグを背中の下に当てて。

アンナ（実行する）：これでいい？

ファティマ（自信なさげに）：どうかな... もう少し左。もう少し右。もう少し上。もう少し左。どうかな... よし。あなたたちに会えたのは本当に新年の奇跡だわ！意識を失いかけてた、もうほとんど持たない！（かなり軽快に左足を前の座席の背もたれに上げる）

アンナ（コメントする）：おやまあ。

ファティマ（右足で足をかけられる場所を探し、エゴール・ゲオルギエヴィチに足をかける）：若い人、あなたのバッグを座席に戻してくれない？足をかけたいの。

エゴール・ゲオルギエヴィチは不安そうに鼻を鳴らすが、それでもバッグを座席に置く。ファティマはすぐにバッグに足をかける。

ファティマ：さあ、急いで、急いでレギンスとパンツを脱がせて。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：どういう意味だ？

ファティマ：何がわからないの？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：私はレギンスは履いてない...

ファティマ：あなた、今まで一度も女性のパンツを脱がせたことがないの？

アンナ（エゴール・ゲオルギエヴィチを助けに駆け寄る）：場所を替わりましょう。

エゴール・ゲオルギエヴィチがドアを開ける。

ファティマ（彼の後ろに向かって）：ああああ、風が入ってくる！

エゴール・ゲオルギエヴィチは困惑して立っている。アンナは右前ドアを大きく開け、エゴール・ゲオルギエヴィチを中に押し込み、ドアを閉める。そして自分が彼の席に座る。すぐにファティマのレギンス、タイツ、ブーツを脱がせ、それらを急いで、しかし機械的に、まあまあ丁寧に運転席に置く。

ファティマ：私の下にシートを敷いて！

アンナが実行する。

ファティマ（荒い息遣いで）：いち、に、さん、し、ご、ろく...（間を置いて）いち、に、さん、し、ご...

エゴール・ゲオルギエヴィチ：ちょっと待って、レディース！ここで産むつもりか？

ファティマ：始まったわ！

アンナ：他に選択肢がある？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：吹雪のサプライズだ。誰かが絶対に私たちに突っ込んでくる。

アンナ（エゴール・ゲオルギエヴィチに）：あなたの言う通りよ！（走って運転席に戻り、ファティマの服を抱えてエゴール・ゲオルギエヴィチの膝の上に置く）路肩に寄せるわ。

車が路肩に寄る。

アンナ：ヒーターをつけるわ、ハザードランプもつける。

ハザードランプが点滅する。アンナはファティマのところに戻る。

アンナ：大丈夫？

ファティマ：何も大丈夫じゃない。（荒い息遣いで数える）いち、に、さん、し、ご、ろく... あなたたちのどちらか、出産に立ち会ったことはある？

アンナ：いいえ。

ファティマ：でも、見たことは？

アンナ：もちろん！何度も！

ファティマ：アッラーに感謝！

アンナ：映画でね。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：おお、神よ！私は映画でも見たことがない。

ファティマ：じゃあ、これからあなたたち二人にとって、とても興味深い数時間が始まるわ！

アンナ（元気よく）：わくわくしてきたわ！

エゴール・ゲオルギエヴィチ：間違いなくね。残念だけど、レディース、これ以上あなたたちの仲間に留まるわけにはいかない。急いでるんだ（「残念だ、本当に残念だ」と何か呟く）。電話を取り出す） タクシーを呼ぶよ。

ファティマ（突然、痛みで大声で叫ぶ）：ママ！ママ！

エゴール・ゲオルギエヴィチ（電話を落としそうになる）：救急車を呼ぶ。

ファティマ（同じく突然に静かになり、非常に具体的に言う）：押して
！！！！

エゴール・ゲオルギエヴィチ（呆然と）：私に？

ファティマ：誰に？あなたとあなたの奥さんに。（アンナに）どこを見てるの？！

アンナ（ほとんどパニックになって）：どこを見ればいいのか？

ファティマ（二人に向かって）：押して！！！頭は出てない？

アンナ：どこから？

ファティマ：アッラー、助けて！

アンナ：わかった！（エゴール・ゲオルギエヴィチに）赤ちゃんが出てきたわ！

エゴール・ゲオルギエヴィチ：どこへ？

ファティマ（大きなうめき声とともに）：頭が出てきたら見逃さないで！（突然、痛みで大声で叫ぶ）

アンナ：全部わかったわ！心配しないで！（エゴール・ゲオルギエヴィチに）あなたもこっちを見て、見守ってて！

エゴール・ゲオルギエヴィチ（急いで眼鏡をかけ、アンナがどこを見ているか注意深く追跡し、よく見えるようにシートの背もたれ越しに身を乗り出しながら）：レディース、緊張しないで！私がしっかり見てるから！

ファティマ：おお、アッラー、この試練で私を助けてください！（突然、エゴール・ゲオルギエヴィチに具体的に）そしてあなたは奥さんを助けて！

アンナ（自分がパニックになっているのを隠そうと努力しながら、ファティマに）：何をすればいい？

ファティマ：私の後に続けて言って：「女の子！息を吸った！息を止めた！赤ちゃんを助けて！あなたならできる！」

アンナ：息を吸う（熱心に息を吸う）息を止める（まさに息を止めているので、これはかろうじて発音できる；そして何かを待つ）

ファティマとエゴール・ゲオルギエヴィチはアンナを見て、同じく何かを待つ。ファティマが突然叫ぶ。叫ぶのをやめる。

ファティマ：うまくいってる、うまくいってる！

アンナ（緊張に耐えかねて息を吐く；申し訳なさそうに）：息を吸って、息を止めて、目が回るわ。もう一回はできない。

ファティマ（全エネルギーを動員して）：私に言って！「息を吸って！息を止めて！あなたならできる！」私に、私に言って！

アンナ（繰り返す）：息を吸って！止めて！赤ちゃんを助けて、ママ！私ならできるわ。

アンナ：もちろん、あなたは素晴らしいわ。

ファティマ：今度はあなたが素晴らしいわ。

アンナ：ありがとう！（新生児に）さあさあさあさあ、小さな子よ、伸びて、小さな子よ、伸びて！一緒にいきむのよ、私たちならできるわ！

エゴール・ゲオルギエヴィチ：私はすぐそばにいるよ、レディース！

ファティマ：いきむわ！ できる！ できた！！！！

アンナ（そして彼女の腕の中に赤ちゃんがいる；感激のあまり、頬にキスをする）： できた！ こんにちは！ ここはどう？

ファティマ： 素晴らしい！！！！

アンナ： ありがとう。

ファティマ（赤ちゃんをうなずいて見て、リラックスして）： 小さな子も素晴らしいわ！

アンナ（赤ちゃんをじっくり見て）： 女の子！ 女の子！！ 女の子は素晴らしい！（エゴール・ゲオルギエヴィチに） あなたも素晴らしい！ あなたは私たちの応援団よ！！（赤ちゃんに） あら、なんて綺麗な子なの！

ファティマ： 叩いて！

アンナがためらいながら叩く。

ファティマ： もっと強く！（アンナがためらっているのを見て、さらに大きな声で） 叩くのよ、言ってるでしょ！

アンナが叩く。赤ちゃんが泣き叫び、声を張り上げ、泣き声にむせる。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（心配そうに）： 赤ちゃんはどうした？

ファティマ（バッグに枕のように寄りかかって）： 大丈夫よ。（口調を変えて、アンナに） 切って！

アンナ（ファティマに）： 何を？

ファティマ：へその緒を切るのよ！

アンナ：いいわよ。（まるで車の中でへその緒を切ることしかしていな
いかのような口調で、エゴール・ゲオルギエヴィチに） ヨウ素、アルコ
ール、ナイフ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（少し戸惑うが、すぐに判断する）： ヨウ
素はある。アルコールはある（首を振って、ナイフを探す）。

アンナ： ポケットナイフ、グローブボックスに。

エゴール・ゲオルギエヴィチが見つめ、拭いてアンナに渡す。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： どうやら、切り抜けたようだ！ ただの
怖い思いで済んだ！...

ファティマ（アンナに）： 切って。

アンナ： 切る？ どこを？

ファティマ（手を伸ばして、自分の体の場所をアンナに示す）： ここよ
。

アンナ（へその緒に体を投げ出し、切る）： 切ったわ。

ファティマ： 気を抜かないで！（再び赤ちゃんを指す） そしてここも
。

アンナ： ここ？

ファティマ： だいたいね。2、3センチ残して。

アンナが切る。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（アンナに）：見事だ。よくやった。

アンナはまだ泣いている赤ちゃんをシート越しにエゴール・ゲオルギエヴィチに渡す。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（不安そうに受け取る）：さあ、お嬢さん、こっちにおいで。やっと全部終わったなんて信じられない！！！！

赤ちゃんがさらに大声で泣く。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：なぜ泣いてるんだ？

これらの短い台詞は、エゴール・ゲオルギエヴィチの「しっかりしろ、小さな子よ。君は勇敢だ。君は一番賢い！（考えて、付け加える）君の年齢層ではね。君は美人だ！居心地がいいか？15年後に君に会うのが楽しみだ...」というぶつぶつ言う声を背景に、ますます速いテンポで次々と続く。

ファティマ：もう無理！

アンナ（まだ興奮して）：ママ、わがまま言わないで！

ファティマ：休ませて。

アンナ：休むのは終わってからにしないで！

ファティマ：疲れた。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（突然赤ちゃんから注意をそらし、ファティマに）：みんな疲れてる、いきむんだ。

アンナ（厳しく赤ちゃんに指を振る）：そして君も怠けちゃだめ！お母さんをおかわいがって！頑張れ！頑張れ！ママ、あなたもペースを落とさないで！

エゴール・ゲオルギエヴィチ（アンナに）：まあまあ、興奮しすぎないで。二人とも休ませてやろう。

ファティマ（エゴール・ゲオルギエヴィチに）：口出ししないで！

アンナ：疲れたって！あなたいくつ？

ファティマ：45よ。

アンナ：45？！なおさら、いきみなさい！

ファティマ：なおさら、いきんでるわ！

アンナ：引き寄せてる！もうすぐ！もう！（腕の中に赤ちゃんを抱く）誰が生まれたか見てみましょう...

ファティマ：男の子よ。（エゴール・ゲオルギエヴィチに）バッグからシーツ、毛布、帽子を出して。この子も包んで。（バッグに寄りかかり、目を閉じる）

アンナ：へその緒を切るわ（実行する；間を置いて）焼灼した。（エゴール・ゲオルギエヴィチに）次の子を抱いてて。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（不安そうに）：でも、なぜ泣かないんだ？（赤ちゃんに）君は男かどうか？男なら叫ばなきゃ！

アンナが赤ちゃんを叩く。もう一度叩く。もう一度。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（アンナに囁く）：泣かない？

ファティマ（大きな囁き声で）：なぜ泣かないの？私のところに持ってきて。

アンナが持っていく。全員が固まって待つ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（静寂の中で、恐怖を込めて）：私だけか... 彼は... ちょっと青ざめてないか？

ファティマ（気丈に振る舞おうとして、アンナに）：おお、アッラー、私たちを助けて...

エゴール・ゲオルギエヴィチは生まれたばかりの女の子をファティマの胸に移す。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：抱っこできますか？

ファティマ（どこか冷えた声で）：できるわ（赤ちゃんを受け取る）もうダメ、力が尽きた。おお、アッラー、私の息子を助けて...

エゴール・ゲオルギエヴィチ（アンナに）：男の子を渡して！そして手伝って！

アンナが渡す。今の様子は、エゴール・ゲオルギエヴィチだけが自信を持って振る舞い、女性たちは完全に途方に暮れているように見える。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：アンナ、一緒にやりましょう。

アンナは車を一周し、ドアを開けて運転席に座る。その間、エゴール・ゲオルギエヴィチは赤ちゃんを抱えたまま助手席の背もたれを倒す。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（アンナに）：おくるみをここに（背もたれを指す）。

アンナが実行する。エゴール・ゲオルギエヴィチは赤ちゃんをおくるみの上に寝かせ、手を頭の下に差し入れ、鼻を押さえ、自分の口から空気を赤ちゃんの口に吹き込む。一度（1秒か少し）そして二度目（1秒か少し）。その後、両手の指で赤ちゃんの胸を軽く叩き始める。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（ファティマのために）：人工呼吸と胸の叩き方。これでいいですか？

ファティマ（かろうじて）：ええ...

車内は静寂。エゴール・ゲオルギエヴィチは手順を繰り返し、赤ちゃんの脈を測る。赤ちゃんがかすかな音を立てる。

ファティマ（もう少し元気になって）：息子よ、お願い... お願い、頑張っ

赤ちゃんがもう少し大きな音を立てる。エゴール・ゲオルギエヴィチは赤ちゃんを抱き上げ、ファティマに渡す。女の子は彼が受け取る。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：あなたの方が何をすべきかよくご存知でしょう。

ファティマ：ありがとう。

赤ちゃんは彼女の上につ伏せになり、母親と顔を合わせている。ファティマは優しく赤ちゃんの背中、肺のあたりを叩く。アンナは慎重に赤ちゃんに毛布をかける。

アンナ（呆然とエゴール・ゲオルギエヴィチを見る）：どこでそんなことを覚えたんですか？

エゴール・ゲオルギエヴィチ（しぶしぶ）：かつて... 山の中で...

アンナ：あなたを誇りに思います！

エゴール・ゲオルギエヴィチ：私もあなたを誇りに思うよ。

アンナ：つまり、私たちはチームですね。

男の子が泣き声をあげる。特に活発ではないが、それでも先ほどよりはマシだ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：負けるな！ 君は男だろう！

彼の腕の中の女の子も泣き始める。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（揺らしながら）：兄ちゃんを心配してるんだな。（赤ちゃんに）大丈夫だよ！（歌う）ねんねんころりよ... 森にクリスマスツリーが生まれた、森で育った、ねんねんころりよ、冬も夏もすらりとして、緑だった。

アンナ：吹雪が子守唄を歌った「眠れ、クリスマスツリーよ、おやすみ！」（合いの手を入れて）笑ってる、笑ってるわ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：誰かがそこで雪で包んでくれたんだ...

アンナ：霜が雪で包んでくれたのよ。

アンナとエゴール・ゲオルギエヴィチ（一緒に）：凍らないでね。

エゴール・ゲオルギエヴィチは静かに短く笑う。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（声をひそめて）：寝たな...（女の子をアンナに渡す）

この後、全員がより静かに話し始める。

アンナ：そうだわ！この素晴らしい年を締めくくりましょう！シャンパンを持ってきたの。クリム・バラクラヴァ・ロゼのブリュットよ。（ファティマに）あら。あなたは飲めないわね。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（アンナに）：あなたもたぶん飲めないでしょう。あなたはタクシー会社の荣誉掲示板に載ってるんだから。

アンナ：3人分は計算が合わないわ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（時計を見る）：2時間で2人の子供！平均して1時間に1人！なかなかの成果だ。

ファティマ：明日にはクリニック「トロイツァ」の荣誉掲示板にあなたたちの写真が載るわ。約束する。

アンナ：つまり、私の写真はタクシー会社だけでなく、産婦人科クリニックにも載るのね。出世したわ！（エゴール・ゲオルギエヴィチに）あなたは前世で確かに産科医だったんでしょ、認めなさいよ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：前世じゃないだろうな。まあ、もしかしたら、前世の前世の前世の前世の前世... 何かの産婆さんだったかもしれないな。

アンナ：もう終わりね！こんなに早く！寂しいわ。（エゴール・ゲオルギエヴィチに）あなたは寂しくないの？

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 何て言ったらいいか...

ファティマ（か細い声で）： あなたたちと一緒にいて良かった！

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 気に入ってもらえて嬉しいよ！ またいつかやりましょう、声をかけてください！ いいですか？（ファティマから赤ちゃんを受け取り、おくるみに包む；赤ちゃんはかなり有望な音を発する）

アンナ（ファティマに服を手渡す）： さて、これで全員を産科病院に連れて行きますよ。

ファティマが服を着る。

ファティマ（アンナに）： あなたの名前は？

アンナ： アンナ。

ファティマ（エゴール・ゲオルギエヴィチに）： そしてあなた、産婆さんは？

エゴール・ゲオルギエヴィチ： エゴール・ゲオルギエヴィチだ。

ファティマ（もう座っている）： はじめまして。ファティマです。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： こちらこそ。さて、産科病院に行くか？ どうやって行くか決めよう。

ファティマ： 何も決める必要はないわ。私の車はすぐそこよ。

アンナ：じゃあ、どうする？ 私があなたの車を運転するわ。そしてあなたは（エゴール・ゲオルギエヴィチに）子供たちを運ぶのを手伝って、ここに戻ってきて。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：できない。

アンナ：何ができないの？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：車を離れられない。

アンナ（エゴール・ゲオルギエヴィチを注意深く見て）：顔色が青いわよ。

ファティマ：血压ね（錠剤を取り出し、彼に差し出す）舌の下に入れて。

エゴール・ゲオルギエヴィチが錠剤を舌の下に入れる。

ファティマ：ブリスター全部持って行って。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：何のためだ？

ファティマ：役に立つわ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：それはないだろうな（でも受け取る）。

ファティマ（エゴール・ゲオルギエヴィチに）：大丈夫よ。（アンナに）自分で何とかするわ。（エゴール・ゲオルギエヴィチに）手を出して（プロ用の血压計を取り出し、彼の血压を測る）160 over 100。脈は？！すごい！頻脈？それともストレス？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：年齢だよ。

ファティマ：めまいがする？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：めまいというほどじゃないが、何かふらふらするな...（間を置いて）でも、治まってきてる。

ファティマ：本当？

エゴール・ゲオルギエヴィチ（自信を持って）：まだ生きるよ、心配しないで（シートを元の位置に戻す）。

ファティマ（アンナに）：私を産科病院に連れて行かなくていいわ。

アンナ：でも...

ファティマ：「でも」はなしよ（車から不器用に降り、エゴール・ゲオルギエヴィチのバッグとドアに格闘しながら）。

その同時に、アンナはファティマのバッグを車内に引き入れ、車を離れようとする。突然、彼らの横を別の車が猛スピードで通り過ぎる。数瞬の間、全員の注意がこの乱暴な運転手に集中することが重要だ。

アンナ（通り過ぎた車の運転手に向かって）：どこへ突っ込んでるの？
！食卓へ？食卓にぶつからないといいけど！

ファティマ（運転席のドアに近づく；車から出たアンナに、手を差し出して）：ここに私の子供たちを置いて。

エゴール・ゲオルギエヴィチは順番に子供たちをアンナに渡し、アンナはファティマのバッグを地面に置き、子供たちをファティマの腕の中に収める。

アンナ：でも...

ファティマ：「でも」はなしよ。ご主人を大切に！彼は本当の男よ！（エゴール・ゲオルギエヴィチとアンナに）ありがとう、友よ...（言葉に詰まり、続けられない）ありがとう、友よ...（また続けられない）つまり、ありがとう... つまり、友よ...

アンナ（子供たちごと彼女を優しく抱きしめる）：本当に一人で大丈夫ですか？

ファティマ：大丈夫よ。車まで送ってくれるだけでいいから。

アンナ：いいわよ。

ファティマ：私のポケットに手を入れて。

アンナがファティマのジャケットのポケットに手を入れる。

ファティマ：名刺を取って。

アンナ：見つけた。

ファティマ：私を送ってくれたら、すぐに手書きの番号に電話して。

アンナ：そうするわ。お元気で、幸せに、ご多幸を！あなたにも、あなたの子供たちにも...

エゴール・ゲオルギエヴィチは、真の紳士として、苦労しながら車から降りる。

ファティマ：ありがとう！あなたにも！そしてあなたのご主人にも！（エゴール・ゲオルギエヴィチの方を向いて）あなたたちは本当に素晴らしいカップルね。お互いをどれだけ愛しているか一目でわかるわ。お

互いを大切に、そして、あなたたち二人にはもう一人友達がいることを
忘れないで！ 本当の友達よ！

エゴール・ゲオルギエヴィチ（ぎこちないが、ファティマと子供たちを
抱きしめる）： 良いお年を！

ファティマ（アンナに）： そろそろ行かなくては。あなたたちの名付け
子、エゴール君とアーニャちゃんが凍えちゃうわ。

女性たちは去っていく。エゴール・ゲオルギエヴィチはしばらく車のそ
ばに立って考え込む。それから助手席に座り、ラジオをつける。シャリ
ヤーピンが歌っている：

地上の全人類は ただ一つの神聖な偶像を崇める それは全宇宙を支配す
る その偶像は黄金の子牛

心を込めて、 偶像を称え、 様々なカーストや国の人々が 果てしない輪
になって踊る。

台座を取り囲んで、 台座を取り囲んで。 サタンがそこで舞踏会を主宰
する、 そこで舞踏会を主宰する。 サタンがそこで舞踏会を主宰する、
そこで舞踏会を主宰する。

この黄金の偶像は 天の意志を軽蔑し、 嘲笑いながら、 変える 天の聖な
る律法を。

黄金の神に仕えるため 国境は戦いで立ち上がり 人間の血が川となって
刀身を伝う。

人々は金属のために死ぬ、人々は金属のために死ぬ、サタンがそこで舞踏会を主宰する、そこで舞踏会を主宰する、サタンがそこで舞踏会を主宰する、

そこで舞踏会を主宰する。サタンがそこで舞踏会を主宰する、そこで舞踏会を主宰する。

アンナが戻ってくる。エゴール・ゲオルギエヴィチはラジオを消し、シートを元の位置に戻す。

アンナ：大丈夫？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：ああ。さて、行くか？

アンナ：ちょっと待って。友のために電話を（名刺と電話を取り出す）クリニック「トロイツァ」ですか？ ファティマ・ガミドヴナ・アラノヴァの代理で電話しています。彼女は現在、有料道路13ベレジナ、環状道路から約25キロの地点で自分の車の中にいます。至急迎えに行ってください。（間を置いて）生きていて元気です。大丈夫、双子を産みました！ 男の子と女の子。ついさっき！（電話を切り、車を発進させる）吹雪ね！

エゴール・ゲオルギエヴィチ：吹雪の何が問題なんだ？

アンナがカーオーディオをつける。曲が流れる。

愛と幸運を望み、友人と情熱的な言葉を、夢見ていたのは、子供でいっぱいの家！ ああ、すべては別の結末を迎えた。

魅力と勇気の輝きの中で、私の王子は高い馬から 私のために飛び降りた 白い...紙の野原の中で。

最後の埠頭から手を振った、翼のように彼に... そして、まるで歪んだ鏡の中のように、鈍い現実が揺れていた。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（電話を取り出し、連絡先を押す；アンナがオーディオを消す）： もしもし（アンナに） 留守電だ。サッヴァ・ニキーチチ、大丈夫だ、連絡する（電話を切る；アンナに） 「鈍い現実が揺れていた」 ... いい歌だな。

アンナ（生き生きとして）： 本当に？ 気に入ってくれたの？

エゴール・ゲオルギエヴィチ： ああ。

アンナ： 特にそのフレーズ？

エゴール・ゲオルギエヴィチ： それも含めて。「鈍い現実」。ある意味、私の人生そのものだ。パラダイスまであとどのくらい？

アンナ： だいたい25～35分ね。何もなければ。あなたはパラダイスで新年を迎えるの？

エゴール・ゲオルギエヴィチ（再び訂正する）： パラダイスで？ そうでないことを願っている。何かを渡したら戻るんだ。あなたはどこで迎えるんだ？

アンナ： まだわからないわ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 待ってる人がいるのか？

アンナ：少なくとも私は何も知らないわ。シャンパンは持ってるし、冷やす必要もないわ。それに、細いストラップのリトルブラックドレスもあるの。私は

脚が綺麗だから、見せびらかすのよ。緊急事態には完全に備えてるってこと、わかってね。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：もし君が待ってくれるなら...

アンナ：それで？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：モスクワまで送ってくれないか。

アンナ：どこへ？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：どこかへ。できるか？

アンナは黙っている。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（時計を見る）：9時半だな...（アンナに）あとどれくらい？

アンナ：20分くらいかもね。吹雪だし。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：ゴールが見えてきたな。サプライズだけはないことを願う。

そしてすぐに、車が異音を発し始める。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：どうやら、言ったことが現実になったようだ。何の音だ？

アンナ（車を止める）：マフラーを確認するわ（外に出て、車を一周し、マフラーを足で蹴って、戻ってくる）マフラーは大丈夫そうよ（車を発進させる）。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：でも、音がするぞ。僕はいつも、この中国製ジープは信頼性が低いと思ってたんだ。

アンナ：もうすぐそこよ、祈ってて。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：もし持たなかったら？

アンナ：レッカー車を呼ぶわ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：大晦日の夜に？

その瞬間、車がエンストした。エゴール・ゲオルギエヴィチとアンナはしばらく黙っている。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：これがサプライズだな。

アンナ：乗り越えられるわ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（鼻を鳴らして）：乗り越えてくれ。

アンナがイグニッションキーを回すと、車が動き出す。

アンナ：乗り越えたわ！

エゴール・ゲオルギエヴィチ：おや。

アンナ：再起動よ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： いやいや、君がタクシー会社の荣誉掲示板に載ってるのも無理はない。

ほぼ同時にエンジンが再び止まり、車が止まる。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 乗り越えられなかったな。

アンナがスターターを押すが、車はかからない。

アンナ（エゴール・ゲオルギエヴィチに）： 今日は必ずパラダイスに連れて行くわ、心配しないで。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（ため息をつく）： なるほど...

アンナ： 車をパラダイスの方へ少し押してもらえないかしら？

エゴール・ゲオルギエヴィチは「わかった」と言って外に出て、車の後ろを押す。アンナも外に出て、ハンドルを支えながら、前のドアのところで押す。車はゆっくりと路肩に寄る。アンナがハザードランプをつける。

アンナ： ありがとう！ 大丈夫？

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 問題ない。

アンナ： 戻ってきて。

エゴール・ゲオルギエヴィチが席に戻る。アンナがボンネットを開ける。電話のライトでエンジンルームを照らす。エゴール・ゲオルギエヴィチは自分のポケットを軽く叩き、「錠剤、錠剤」と言いながら、ブリストラーを見つけ、錠剤を取り出し、舌の下に入れる。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：しかし、役に立ったな。

アンナがボンネットを閉める。席に戻る。エゴール・ゲオルギエヴィチは黙っている。

アンナ：大したことじゃないわ。ヒューズを替えれば走るわよ。

エゴール・ゲオルギエヴィチは黙っている。

アンナ（彼の肩に手を置く）：私はあなたを誇りに思うわ。念のため言っておく。（車外に出て、しゃがみ込み、ハンドルの下のヒューズボックスを開ける） だいたい... だいたいね。危険は冒さないわ。（エゴール・ゲオルギエヴィチに） グローブボックスから、取扱説明書を取ってくれない？

エゴール・ゲオルギエヴィチが取り出して手渡す。アンナはパンフレットを前の座席に置き、開き、やはり車外でしゃがみ込んだまま、没頭する。しばらく二人とも黙っている。アンナがヒューズをいじっている。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：アンナ。

アンナが顔を上げて彼を見る。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：正直なところ、私は喜んでここに君と留まるよ。

アンナ（気まずそうに）： ええと... あなた... そんなに真剣に言わないで。実際は... 大丈夫... 乗り越えるわ...

エゴール・ゲオルギエヴィチ： そうだとは思う。でも、今はもっと自分のことなんだ。こう考えたんだ... 私が75歳になるまで、大人になってから初めて、なんて言うか、こんなに幸せな気持ちになったのは...

まるで吹雪じゃなくて春のような気分だ。

アンナ： ロシアでは、それが邪魔になることはないわ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： これが、ここ60年...いや、それ以上で初めてだ（口を閉ざす）。

アンナ（間を置いて）： 話したい？

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 自分勝手によければ、ここに座って君と話し続けていたい... 動いていようと止まっていようと関係ない。しかし... バッグを届けなければならない。これは深刻なんだ。信じてくれ。すべてはバッグ次第だ... 届けなければならない。（彼の電話が鳴る） もしもし、サッヴァ・ニキーチチ。すべて順調です、ただの吹雪です。30分後には届けます。良いお年を。もちろん、すぐに電話します。連絡を取り合いましょう（電話を切った。車内を見回し、自分自身に言うように、今は落ち着いて） よし... バッグはどこだ？（車外に出て、右後部ドアを開け、そこをすべて見回す） アンナ、私のバッグをトランクに置いたか覚えてる？

アンナが素早く立ち上がり、トランクに近づいて開ける。

アンナ（ゆっくりと）： 置いてないわ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： つまり... バッグはどこにもないってことか。

アンナ： そうみたいね...

エゴール・ゲオルギエヴィチ： よし...（再び車内を注意深く調べ、車を一周し、なぜか車の下を覗き込む） じゃあ、どこだ？

アンナ： 集中しましょう。どこにあった？

エゴール・ゲオルギエヴィチ（思い出して、指をさす）： ここだ。ファティマが足をかけてた。

アンナ： バッグが落ちたの？ まさか？ でも、どうして気づかなかったの？

エゴール・ゲオルギエヴィチ： あの乱暴な運転手が通り過ぎた時だろう。

沈黙。

アンナ： バッグには何か重要なものが入ってたの？

エゴール・ゲオルギエヴィチ： そう言えるな。

アンナ： もしかしたら、そんなに悪いことじゃないかもしれないわよ？

沈黙。

アンナ： あなたの言う通り、バッグはファティマが車から降りた時だけ落ちた可能性があるわね。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 戻れるか？

アンナ： 理論上は可能だけど、まずヒューズを替えましょう。あなたの言う通り、戻るべきね。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：チャンスは少ないだろうな。

アンナ：でも、試してみる価値はあるわ（ヒューズをいじりながら、生き生きとして） いいアイデアよ！ 警察に電話して、バッグを探してもらいましょう！

エゴール・ゲオルギエヴィチ：そのアイデアはあまり良くない。

アンナ（慰めようとして）：もしかしたら、誰かがもうあなたのバッグを見つけて、まもなく遺失物センターに届けるかもしれないわ。それが警察に。バッグが開けられて、中身が調べられる。中にはきっとあなたの連絡先が見つかるはずよ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：見つからないことを願うよ...

アンナ：それなら、広告を出せるわ。中身を説明するの。あなたにとって価値があるものでも、他の人にとっては全く価値がないかもしれない。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：それはないだろうな。中には、いわゆる普遍的な価値があるんだ。

アンナ：じゃあ、バッグの中に何が入ってるの？

エゴール・ゲオルギエヴィチ（間を置いて）： **1300万**だ。

アンナ：「**1300万**」って何が？

エゴール・ゲオルギエヴィチ： **1300万**ユーロだ。

アンナ：「**1300万ユーロ**」って何が？

エゴール・ゲオルギエヴィチ： バッグの中だ。

アンナ： まあ、1300万なら1300万ね。あなたって迷信深いの？

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 迷信深い？ 面白い反応だな。

アンナ： 言いたくなければ言わなくていいわ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（ため息をつく）： バッグの中に1300万ユーロがある。500ユーロと200ユーロ紙幣で。真空パックだ。

アンナ： 真空パック？ 冗談でしょ？

エゴール・ゲオルギエヴィチ： アンナ、そんなに信じられないか？

アンナ（間を置いて）： だって、私の人生では、1300万ユーロと私が同じ場所に、同じ時間に、近い距離にいたことは一度もないもの。（突然叫ぶ） 1300万ユーロ！！！ 本気で言ってるの？！

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 他人の金だ。運ぶのを引き受けたただけだ。A地点からB地点へ届ける、いわばね。

アンナ： 1300万ユーロ？ 夜に？ タクシーで？

エゴール・ゲオルギエヴィチ： もっと別の計画だったんだ。

アンナ： 1300万ユーロ... あのバッグのこと？ あのファティマが足をかけてたやつ？ 一体全体、これは何なの？

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 賄賂だ。

アンナ： 1300万ユーロ？ 誰に、何のために渡すの？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：それは細かいことだ。

アンナ：でも、なぜあなたが関わったの？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：5パーセントのためだ。

アンナ：何の5パーセント？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：1300万の5パーセントだ。

アンナ：1300万の5パーセント？ それっていくら？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：65万だ。

アンナ：ユーロ？！

エゴール・ゲオルギエヴィチ：ああ。私の報酬は65万ユーロ、手取りだ。

アンナ：65万ユーロ？ 500ユーロと200ユーロ紙幣で？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：何か不満か？

アンナ：個人的な質問をしていい？ あなた、これで殺されたりしない？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：理論上はあり得る。でも、可能性は非常に低い。

アンナ：怖いわ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：私のことが心配なのか？

アンナ：あなたも、それに全体的にも。あと2キロで有料道路は終わりよ。Uターンして、あなたの1300万ユーロを探しに行くわ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：いや、君がこの件に巻き込まれるべきじゃない。危険だ。

アンナ（車を指して）：タイムマシンに乗ってください。2時間前の過去に戻って、あなたを救うのよ！

エゴール・ゲオルギエヴィチ：（間を置いて）ありがとう。（間を置いて）あの呪われたバッグを誰も先に見つけていなければいいんだが。

第二幕

典型的なガソリンスタンドの複合施設：柱で支えられた屋根とオペレーター室。ガソリンスタンドと暗い空の間で、明るい「С НОВЫМ ГОДОМ」（新年おめでとう）の電飾がきらめき、揺れている。施設の前には大きなクリスマスツリーがあり、輝くオーナメントを身にまとい、円形の台の上でゆっくりと絶え間なく回転している。オペレーター室の中では、シャパが大きなモップで床を拭いている（遠くからは、シャパが巨大な水槽の中にいるように見える）。ここにはレジ、ミニマーケット、ミニマルなカフェ、トイレがある。トイレには蓋が閉まった便器と必要なものが見える。夜。吹雪は続いている。ガソリンスタンドに車はない。チェーン店の名称「ルソイル」が光っている。

細い踏み固められた道を、スヴェトーニイ・ブボラがサンタクロースの衣装を着て遠くから近づいてくる。オペレーター室の方から、かすかに吹雪を通して歌が聞こえる：

五分間の歌を歌ってあげる この僕の歌をみんなで歌っておくれ

(以下同様)

伝統的なプレゼント袋の代わりに、スヴェトーニイはあのバッグを引きずっている。もう一方の手には楽器ケースがある。サンタの見た目は完全に伝統的ではない。ゴムで留めたひげは邪魔にならないように背中にずらしてある。帽子は傾いている。コートは歩きやすいようにまくり上げられ、折り目が腰の上に垂れ下がっている。

立ち止まる。バッグに座る。ロダンの考える人のポーズで休む。オペレーター室の方から、同じ「五分間、五分間...」が、もう少し大きく聞こえてくる。スヴェトーニイ・ブボラは立ち上がり、バッグの周りを歩き、注意深く調べる；明らかに初めてではない。スヴェトーニイ・ブボラ：誰がこんなに汚い、縞模様の、ひどいやつを、誰が落としたんだ？... バッグをさらに引きずる。一方、有料道路の路肩にはエゴール・ゲオルギエヴィチとアンナが立っている。こちらにも「五分間、五分間...」がかすかに聞こえる。エゴール・ゲオルギエヴィチ：あのクソバッグは今どこにあるんだ？ アンナ：吹雪の中を探すのは難しいわ。エゴール・ゲオルギエヴィチ（携帯電話を取り出して何かを確認する）：サッヴァ・ニキーチチから着信8件... 今はかけ直さない。彼の新年を台無しにしてしまったな... 君の新年も台無しにしてしまった。アンナ（ゆっくりと）：台無し？... いや... そうは思わないわ。エゴール・ゲオルギエヴィチ（半分質問、半分断言）：ガソリンは空っぽってわけか？ アンナ：悔しいわ。それに、ガソリンスタンドはあそこにあるのに。（ガソリンスタンドの方に手を振る）エゴール・ゲオルギエヴィチ：惰性で何とかたどり着けないか？ アンナ：

無理よ。道路は下りじゃなくて、むしろ少し上り坂だもの。だから、歩いてガソリンスタンドに行くことを提案するわ。ガソリン携行缶を買って、戻って、給油して、それから...

エゴール・ゲオルギエヴィチ：それから？ 具体的には「それから」何を？ 具体的には「どこへ」？ 考えて、考えないと。あのクソバッグはどこにあるんだ。

アンナ：演繹的な方法を提案するわ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：提案してくれ！

アンナ：バッグは持ち上げられないくらい重い。重さは...

エゴール・ゲオルギエヴィチ：まあ、**30**キロくらいだな...

アンナ：見た目は魅力的じゃない。運転手はそんなために停まったりしないわ。偶然の通行人？ 大晦日の夜に？ 吹雪の中で？ 有料道路上？ ありそうにないわ。まあ、よく言うけど、偶然の通行人はどこにでも現れるものだけだね。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：バッグはダイヤルロックだ。

アンナ（賛成して）：重要な点ね！ 偶然の通行人は、情報もなくそんな重いものを持ち歩かないわ。情報はダイヤルロックの中よ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（どうやら自分を落ち着かせているようだ）：君は聡明な女性だし、君の言う通りだ。もしそんな変人がいたとしても、きっとバッグを捨てるだろう。

スヴェトーニイ・ブボラ：ここに置いちゃおうか？...（怒ってバッグを蹴る）もうたくさんだ！！！！こんな大きなバッグを...落とすなんて。どれだけ飲まなきゃいけないんだ？！引きずって、引きずって...もしかして無駄だった？（何度かバッグを蹴る）中に何が入ってる？ 答えろ！そんなに価値のあるものが何だ？...まあいいや...もう少しだ（何度かため息をつき、バッグを引きずりながら歩き続ける）。

エゴール・ゲオルギエヴィチは道路で待っている。アンナがプラスチックの袋を持って近づく。

アンナ：さて、行くわよ！

エゴール・ゲオルギエヴィチ（袋について）：貸してくれ？

アンナ（声に笑みが浮かぶ）：あら、失くしそうで怖いわ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：滑りやすいな。君に私の腕を差し出そう。（曲げた腕をアンナに差し出す）

アンナ：受け取るわ。（彼の腕にすがり、二人は慎重に、互いに支え合いながらガソリンスタンドへ歩いていく）

スヴェトーニイ・ブボラ（オペレーター室の前で立ち止まり、重いため息をつく）：半ブード（約8kg）も運んできたのに、何だかわからない！

この時、オペレーター室が観客の方にせり出し、前景に浮かび上がる。これ以降の物語はすべてこの部屋の中、またはそのすぐ近くで展開される。シャパは満足げに空間を見回し、モップと雑巾を片付ける。電話が鳴る。

シャパ：もしもし、イリヤ・ウラジーミロヴィチ。私です... ブボラ... シャパ... シャパ・ブボラです... こちらはすべて順調です、大丈夫です。（まるで些細なことのよう、急ぎ足で続ける）それで、また誰かが満タンに給油して... つまり、3番のポンプが空振りしたんです。吹雪で... ナンバーが読み取れませんでした。こんな新年のサプライズです。（間を置いて、聞く）100リットルです...（急いで）はい、もちろん。すぐに報告書を送りました。ご覧になりましたか？（間を置いて）警察にもコピーを...（間を置いて）見つからない？はい、わかっています。でも、もしかしたら... はい、わかっています。はい、わかっています。私の給料から引くんですか？いいえ、わかりません。やっぱりわかりません。（間を置いて、別の口調で）ひとつだけわかったのは、代理を引き受けたのが間違いだったってことです。（間を置いて、その後苦々しく）そうですね、年末年始の料金ですものね。わかっています。料金は全部罰金に消えて、さらに持ち出しです。家で祝ってれば良かった。でも、どうしろって言うんですか、イリヤ・ウラジーミロヴィチ？それは不当ですよ！（間を置いて）でも、どうしろって言うんですか？あんなにたくさん車が来てたんですから。それに...せめて新年くらい罰金はやめてくださいよ。（間を置いて）あなたにも新年があるのはわかっています。でも、私たちの「新年」は全然違います。あなたには利益、私には罰金です。（間を置いて）ああ、もう、辞めてやりますよ...怒らないでください、でも率直に言います：ここは決して楽園じゃないんですからね！（イライラして、やや声を張り上げて）ええ、落ち着いています。今？（落ち着こうとする）今は静かです。車は全然いません。つまり、まったくいません。吹雪です。新年です。朝になればまた来ます。「一人」ってどういう意味ですか？夫を待ってるんです。ここでちょっと彼と一緒に祝っ

て、それから一緒に家に帰るんです。彼は新年の頃に来ると言っていました。彼は仕事です。もう新年？ どういう意味ですか？ 何時ですか？ あと5分？ ありがとう... 私もあなたを祝福します... はい、ありがとう... 私もあなたに幸せを祈ります。はい、ありがとう。いいえ、怒ってません。また新年に。（電話を切り、困惑して繰り返す） あと5分？... でも、スヴェトカはどこ？ いつもこうなんだ！ 夫はどこにいるんだ？！

スヴェトーニイ・ブボラがオペレーター室のドアを開ける。彼がバッグを引きずり込む間、部屋に「五分間、五分間」の歌の断片が流れ込む。スヴェトーニイ・ブボラがドアを閉め、歌は途切れる。

スヴェトーニイ・ブボラ（入り口で）： スヴェトーニイ・ブボラ、稼ぎを持って帰ってきたぞ！ シャパ、踊れ！ たくさんたくさんお金を持ってきたぞ！

シャパは何も答えず、わざとらしくモニターに近づき、何か調べている。

スヴェトーニイ・ブボラ： 明けましておめでとう、シャパ！

シャパは答えず、モニターを見つめるだけ。

スヴェトーニイ・ブボラ（気さくに）： 待ってる、待ってる、邪魔しないよ。

エゴール・ゲオルギエヴィチとアンナは同じ道をゆっくりと、滑らないように注意しながらオペレーター室に向かって歩いている。彼らにとって歌はもうかなりはっきりと聞こえる。

スヴェトーニイ・ブボラ： おいシャパ、何の映画見てるんだ？

シャパ（何の表情もなく）：映画？ そうね！ とてもお祭りらしいわ。
。「残高管理」ってやつよ。

スヴェートーニイ・ブボラ： ドムラだよ（ケースを振って見せる）。

シャパ： あなたのドムラとはもう20年の付き合いよ。でも今日は何か新しいもののね。

スヴェートーニイ・ブボラ（バッグを蹴る）： ああ、これか。見つけた！

シャパ： 見つけた？！ これ？！ それで、これに何が入ってるの？

スヴェートーニイ・ブボラ（哲学的に）： 誰が知ってる？

シャパ： どこで、誰が落としたの？

スヴェートーニイ・ブボラ（肩をすくめて手を広げる）： 道路に落ちてた。
。

シャパ： 落ちてた？ これが？ それで、中を確認もせずに、ただ引きずってきたの？

スヴェートーニイ・ブボラ： 錠がかかっているんだ...

シャパ： 開けなさいよ！！！！

スヴェートーニイ・ブボラ： ダイヤルロックだ。

シャパ： じゃあ、触ってみてよ！

スヴェートーニイ・ブボラ： 触りようがなかった。自分で行けよ。それか、ロックを壊そう。

シャパ： やめてよ。スヴェトーニイ・ブボラ、自分がどこにいるかわかっているの？

スヴェトーニイ・ブボラ： 吹雪の中だ。

シャパ： スヴェトーニイ・ブボラ、それは間違いだ。私たちの周りはガソリンよ！

スヴェトーニイ・ブボラ： それがどうした？

シャパ： スヴェトーニイ・ブボラ、私たちの周りにいるのは誰？

スヴェトーニイ・ブボラ： 誰もいないよ。静かだ。

シャパ： スヴェトーニイ・ブボラ、間違いだ。私たちの周りにはテロリストがいるの！ あなたがロックを壊し始めたら、それが爆発するわ！！
！そしてすぐに楽園にたどり着くのよ！

スヴェトーニイ・ブボラ： シャパ、もしかしたら新年のプレゼントかもしれないって考えなかったのか？

シャパ： そんなこと考えもしなかったわ！ スヴェトーニイ・ブボラ、それを拾った場所に戻しなさい。そして、これからはわからない出来事に決して干渉しないこと！

スヴェトーニイ・ブボラ： シャパ！ もしもお金だったら？

シャパ： スヴェトーニイ・ブボラ、もう笑ってもいい？ 出て行け！

スヴェトーニイ・ブボラはしぶしぶバッグを引きずり出し、クリスマスツリーの下に押し込み、道からはすぐには見えない位置に置く。

スヴェートーニイ・ブボラ：怒らないでくれ。ここでしばらく寝てろ、朝になったら警察に届けるから。（鐘の音が鳴り始める）本当に「あと5分」だ（オペレーター室に戻る；シャパに）シャンパン！

シャパ：ないわ。

エゴール・ゲオルギエヴィチとアンナがオペレーター室に近づく。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：着いたな。

アンナ：「着いたな」は私たちのことじゃないわよ。（彼にシャンパンのボトルを差し出す）急いで、急いで開けて！（鐘の音が鳴り始める）

エゴール・ゲオルギエヴィチは何とかコルクを抜く。アンナはすでにプラスチックのグラスを2つ用意している。彼がシャンパンを注ぐ。

アンナ：クリスマスツリー、鐘の音、吹雪。本物の新年と、すぐそばに本物の男がいる！お祝いと、本物の男たちに乾杯！（グラスを掲げる）

エゴール・ゲオルギエヴィチ：本物の友達に乾杯！

彼らはグラスを合わせて飲む。アンナは毅然として彼の腕を取り、オペレーター室のドアへと連れて行く。国歌の音がミックスされる。花火と祝砲の音。エゴール・ゲオルギエヴィチとアンナは花火を見るために立ち止まる。

オペレーター室内。

シャパ（ついに沈黙を破る）：どこをほっつき歩いてたの？

スヴェートーニイ・ブボラ：ああ、ほっつき歩いてたよ！長い道のりでずぶ濡れになった、たくさんの道を歩いた！ほっつき歩いて、それでお

金を稼いだんだ（間を置いて） お前にプレゼントを買うためにな。そしてたくさん稼いだ！ だってお前の夫は才能があって働き者だからな！
俺は楽しいサンタクロースだ、みんなにプレゼントを届けた！ ドムラを弾いて、たくさんのお金を集めた！

シャパ： お金は最高のプレゼントね。さあ、ちょうだい（彼に近づく）
。

スヴェトーニイ・ブボラは自分のポケットの中でそのお金を必死に探し始める。コートを脱ぎ、普段着のポケットを探す。フェルトブーツを脱ぎ、床の上で振る。フェルトブーツには何もない。ケースを開け、ドムラをケースの横に置き、ケースの中を注意深く調べる。

スヴェトーニイ・ブボラ（申し訳なさそうに、必死に）： まさか無くしたのか？ 一日中稼いで、全部無くしたのか？（コートの上に直接座り、頭を抱える） 信じられない！

シャパ： 私も信じられないわ... 使い込んだの？

スヴェトーニイ・ブボラ： 今日是一滴も飲んでない...（付け加える） 自分の金では。

シャパ： お金をここに。今すぐ。

スヴェトーニイ・ブボラ： 無くした。

エゴール・ゲオルギエヴィチとアンナがオペレーター室に入り、ドアのところで立ち止まる。夫婦が積極的に会話しており、入ってきた二人に気づいていないため、どちらもシャパに話しかける勇気がない。

スヴェトーニイ・ブボラ：無くした... 全部無くした... こんなにたくさん稼いだのは初めてだったのに... そして無くした。全部無くした。

アンナ： どうやらここにも、私たちと同じ不運な仲間がいるみたいね。

シャパ（スヴェトーニイに叫ぶ）： 私はレジ係、販売員、バリスタ、清掃員、食器洗い、コンサルタント... 全部を同時にやってるのよ！

スヴェトーニイ・ブボラ（床から立ち上がる）： 許してくれ...

シャパ（付け加える）： それに燃料設備の専門家もね！

スヴェトーニイ・ブボラ： 朝の10時から立ちっぱなしで、踊り、歌い、また踊り、全部外でだったんだ！ そして無くした。

シャパ： 2つのガソリンスタンドでだ！ 2つも！！ ガソリンスタンドで！！ 同時に！！

スヴェトーニイ・ブボラ： 今日は足で40キロは歩いたよ、少なくとも！ そして無くした。

シャパ（ものすごい速さで言葉が飛び出す）： 朝の8時から夜の8時まで有料道路で働いてるの！ それから朝の8時から夜の8時までヴェルフネペトゥシンスカヤで、そしてその後すぐに夜の8時から朝の8時まで有料道路に直行。そして夜の8時から朝の8時までまたヴェルフネペトゥシンスカヤで、休みなく有料道路。そして朝の8時から夜の8時までヴェルフネペトゥシンスカヤで、夜の8時から朝の8時までまた有料道路。そしてまた夜の8時から朝の8時までヴェルフネペトゥシンスカヤで、朝の8時から夜の8時まで有料道路で寝ずに。空いた時間にはロゴシュカカレンタでバイトしてるの。やっと眠れるのは新年だけ！ 他のガソリンスタ

ンドはみんな休みなのに、ここは休みがなくて、私はシフトを引き受けたのよ。そして今度は、いつ眠れるようになるのか、1年待たなきゃいけないの？ で、お金はあったの、スヴェトーニイ・ブボラ？！

スヴェトーニイ・ブボラ： シャパ、もう謝っただろ...

シャパ（叫ぶ）： 謝った？！ 感謝してるわ！ でもお金の方がもっと感謝してる！

スヴェトーニイ・ブボラ（打ちのめされて）： 正教徒の君が、正教徒に... お金のために声を荒らげるのか？ これを乗り越えて、感じて、認識して、見直して、考えて、分析して、受け入れて... そして整理しなきゃ。

スヴェトーニイはトイレに行き、ドアを閉める。トイレからすぐにナイチンゲールのさえずりが聞こえ始める。

シャパ： スヴェトーニイ・ブボラ、出てきなさい！

スヴェトーニイ・ブボラ： 絶対に出ない。（便器の蓋に座る） ここではナイチンゲールが歌ってる...

シャパ： 出てきなさい、私ここに立ってるから。

スヴェトーニイ・ブボラ： 嫌だ！

シャパ： それで新年を迎えるの？

スヴェトーニイ・ブボラ： もう迎えたよ。ありがとう。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（アンナに）： どうやら私たちはここで邪魔者みたいだ。

アンナ：でも、私たちは気づかれてないみたいよ。透明人間ね。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：アンナ、聞いてもいいか？もし... ええと、もしもの話だが... 君はどこで新年を迎えるつもりだったんだ？

アンナ：選択肢はたくさんあったけど、選ぶ時間がなかったの...

エゴール・ゲオルギエヴィチ（しばらく黙って）：どこか複数の場所で待っている人がいるってほのめかしてるのか？誰かに電話したほうがいいんじゃないか？

アンナ：よくわからないわ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：でも、誰かが待ってるはずだ。夫とか。

アンナ：私は夫なんていなかったの。それに、婚約者すらいなかったわ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：じゃあ、友達とか...

アンナ：彼女は自分の別荘で、娘たちや婿たち、孫、両親、妹とその夫、そしてもちろん夫の親戚、彼の兄弟とその妻、彼の両親と一緒に新年を祝うのよ。私は彼女にとって孤独からの救いではなく、新年の祝賀会でのおまけみたいなものよ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：どこかで同じような話を聞いたな...（考え込む）

アンナ：座らない？（二つのテーブルのうちの一つにある隅のソファを指す）

彼らはテーブルに近づく。エゴール・ゲオルギエヴィチは飲みかけのシャンパンのボトルをテーブルに置く。アンナは同じ二つのプラスチックグラスを置く。エゴール・ゲオルギエヴィチはコートを脱ぎ、隣のテーブルの椅子の背もたれにかける。紳士的にアンナのファーコートを手がける。同じ椅子の背もたれにかける。アンナはズボンとセーター姿になる。

アンナ（自分を見下ろして）： 変身しなきゃ！

エゴール・ゲオルギエヴィチ： どうやら、そのための唯一の場所はまだ占有されているようだ。そして、そこを邪魔しないほうがいいな。

アンナ： 後ろを向いててください。

エゴール・ゲオルギエヴィチが背を向ける。アンナはあまり急がずにセーターを脱ぎ、ブーツとズボンを脱ぎ、タイツとあのストラップのドレスを履く。彼女の着替えは、小さなパフォーマンスだ。自分自身のためか、あるいは未知の観客のための。シャパが突然彼女に気づき、驚きの表情で遠くから見つめる。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（振り返らずに、咳払いをしてアンナに）
： あちこちにカメラがあるよ。

アンナ（優雅に、楽しげに、想定されるカメラに向かってお辞儀をする）
： 皆さん、明けましておめでとうございます、新しい幸せと共に！（エゴール・ゲオルギエヴィチに） 振り返っていいわよ。

エゴール・ゲオルギエヴィチが振り返る。彼の目の前には、ハイヒールでイブニングドレスを着た女性が立っている。アンナがヘアピンを抜くと、髪が肩に広がる。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： おお...

シャパ（トイレのドアをノックする；小声で）： スヴェタ、出てきて。私たちだけじゃないわ。

スヴェトーニイ・ブボラ： 騒ぐなよ、ナイチンゲールの歌を聴きながらうたた寝してるんだ。

シャパ： 私にも眠る権利があるわ！

スヴェトーニイ・ブボラ： じゃあ、仕事場に行って眠ればいいじゃないか。

シャパがテーブルに近づき、エゴール・ゲオルギエヴィチとアンナの前に立つ。

シャパ（あまり愛想よくなく）： 何がご用ですか？

アンナ： ガソリン携行缶とコーヒーをください。

シャパ（暗い表情で）： コーヒーマシンは目の前です、セルフサービスです。携行缶は今持ってきます（去っていく）。

エゴール・ゲオルギエヴィチがコーヒーマシンに近づき、コーヒーを作ろうとするが、うまくいかない。シャパが携行缶を持って戻ってくる。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： うまくいかないな。

シャパ（無気力に）： コーヒーマシンはまだ昼間に壊れたのよ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： どうすればいいんだ？

エゴール・ゲオルギエヴィチ（電話を見て）： 面白い、面白い...（読み上げる）「モスクワ近郊の高級住宅地『パラダイス』で、新年の吹雪の中、治安部隊が別荘の所有者の家を家宅搜索した」 ふむ、ふむ、ふむ、ふむ、ふむ。

アンナ（生き生きとして）： パラダイス？ 治安部隊？

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 「壁、換気口、窓枠、さらにはドア枠の中から隠し場所が見つかった」。ふむ、ふむ、ふむ、ふむ、ふむ、ふむ... 「12月31日の18時から深夜までに、ルーブル紙幣と外貨を満載したトラック6台が別荘の敷地から出て行った」。

アンナ（少し悪戯っぽく）： でも、いいニュースもあるわよ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： それは良い、聞かせてくれ。

アンナ（自分の電話で読む）： 「この大晦日の夜、妊娠中の女性が自らハンドルを握り、産科病院に向かいましたが、途中で陣痛が始まりました。高速道路で彼女は幸運にも車を止めることができました。その車のハンドルを握っていたのは女性で、車内には年配の乗客がいました。ファティマ・アラノヴァ自身の指導の下、これらの人々が緊急分娩を無事に取り扱いました。双子の男の子と女の子が誕生しました。幸せな母親は、救ってくれた人々の名前にちなんで子供たちを名付けました。現在、赤ちゃんたちと、ちなみに自身も高い専門性を持つ産科医でありクリ

ニック『トロイツァ』の産科部長である母親は、元気に過ごしています」。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：そういうことか。さて、これに乾杯しよう（シャンパンを注ぐ）。

彼らはグラスを合わせて飲む。

アンナ：シャンパンがなくなったわ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：何とかしてみよう（シャパに近づき、彼女が眠っていて、いびきをかいているのを見る）

シャパ（すぐに頭を上げ、まるで寝ていなかったかのように）：何かご用ですか？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：シャンパンが欲しいんだ。

シャパ：アルコールは販売しておりません。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：新年にシャンパンなしとはね？ 私と私の連れ合いを助ける方法はありませんか？

シャパ（考えて）：いくら払うか次第ですね。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：あなたはいくら望むんですか？

シャパがカウンターの後ろから出てきて、彼に近づき、何か耳元でささやく。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：おや。シャンパンはあるんだな。しかもとても高い。

シャパ：じゃあ、どうします？ 買います？

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 銘柄は？

シャパ： **Santo Stefano**です。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： サント・ステファノ？ そんな銘柄は知らないな。

シャパ： それでも、人気なんです。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 製造元はどこだ？

シャパ（カウンターの下からボトルを取り出し、ラベルを読む）： モスクワ州ラメンスコエです。

アンナ（席からエゴール・ゲオルギエヴィチに）： **2本**買って。

シャパが**2本**目のボトルを取り出す。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： ちゃんとしたグラスはないのか？

エゴール・ゲオルギエヴィチ： ください。（グラスの箱を見て）ここに**4つ**ある。

シャパ： 買います？（付け加える） お買い得品ですよ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： お買い得品なら... 買うよ。（支払いを済ませ、ボトルとグラスを受け取り、アンナのところに帰り、すべてをテーブルに置き、座る）

アンナ（ボトルを取り、調べる；読む）：「発泡ワイン飲料」。（エゴール・ゲオルギエヴィチに）今、自分がティーンエイジャーになったような気分だわ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：選択肢がなかったんだ。

シャパ（テーブルに近づき、もう親しみを込めて）：温かいものはいかがですか？

アンナ（エゴール・ゲオルギエヴィチに）：温かいものが欲しい？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：温かいものが欲しいね。何があるんだ？

シャパ：グリルソーセージです。とても美味しいですよ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：アンナ？

アンナ：ありがとう。いいわね。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（シャパに）：はい。お願いします。

シャパは離れ、ソーセージとグリルの準備をする。

アンナ（打ち解けて）：さて、今話したい？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：何を？

アンナ：有料道路であなたが言ったじゃない、自分の意志なら、ここに座って話し続けたいって。さあ、座ってるわよ。話したい？

エゴール・ゲオルギエヴィチ（すぐには答えず）：たぶんね。

演出家と俳優への注意。このモノローグは、俳優ミハイル・ヴァシリエヴィチ・ジガロフの本当の話です。他の俳優もこのモノローグを話すことができますが、即興で演じることもできます。もし、その俳優が劇中の登場人物エゴール・ゲオルギエヴィチにふさわしい話（短い長いかは問いません）を持っているなら、その俳優は自分自身の好きな話を語ってください。作者として、私は俳優の即興を制限する可能性のある前置きを意図的に作っていません。しかし、このモノローグ全体は、その後アンナがエゴール・ゲオルギエヴィチは才能があるという台詞につながるものでなければなりません。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： **1949**年のことだった。私は半年間よく勉強して、両親の考えではプレゼントに値すると思われた。新年のクリスマスツリー、労働組合会館の円柱ホールのツリーだ。ソビエト連邦で一番のツリー！想像を絶する美しさのチケット！そして横には「プレゼント」と書かれたタロンがあった。すべての文字が鮮やかで！様々な色だ！

中に入ると、小さな子供たちがツリーの周りで輪になって踊っていて、すぐ近くでは少し年上の子供たちが棒に輪を投げたり、スポーツゲームをしていた。私は見ていた。一人の女性が私に近づいて言った：「少年よ、君の名前は？」私は言った：「エゴルカです」。「エゴルカ、詩は好きかい？」私はうなずいた：「はい」。「大きな声で詩を読むのは好きかい？」うなずいた：「はい」。彼女は言った：「それなら、ついてきなさい」。彼女は私を小さなホールに連れて行った。周囲には両親たちがいた。自分の子供たちを待っているのだ。中央には椅子があった。そしてその女性が宣言した：「今からマーシェンカが詩を読みます」。そして私にささやいた「君はしばらく聞いていなさい」。息をのむよう

な美しさのマーシェンカが、ピンクのガーゼのドレスを着て、中央の椅子に飛び乗り、蝶や虫についての詩を始めた。全員がマーシェンカに拍手し、同じ女性が宣言した：「マーシェンカ、これが君へのご褒美です」。そしてプレゼントのタロンを手渡した。そして私はひらめいた！マーシェンカはこれで二つ目のプレゼントだ！

そして女性は私に言った：「他に読む人は？」 私が読む！ 大成功！！
！大絶賛！ 私にもタロンが渡され、私は二つではなく三つのプレゼントがあることを喜びながら去っていった。すると、その女性がロビーで私を追いかけてきて言った：「エゴール、もう一度詩を読んでもくれるかい？ 人々が頼んでいるんだ」。私はうなずいた：「はい」。戻ると、そこはもう超満員だった！ 再び椅子に飛び乗り、同じ詩を読んだ。そして今度は拍手ではなく、スタンディングオベーションと「ブラボー！」「アンコール！」の叫び声だった。拍手し、笑い、泣いていた。私はまだ7歳だったんだ、想像できるか？ さらにタロンを受け取った！ 三つのタロンを拳に握りしめ、プレゼントと交換するまで大事に持っていた。プレゼントの中には「北極の熊」や別の熊、「ザリガニの首」、ミカン、そして何より貴重な宝物であるチョコレートの「メダル」が入っていた。そしてその同じ晩に、私はそれを家族全員に平等に分け与えた。そして長い年月、私は自分の信じられないほどの演技の才能に対する至福の信念に浸っていた。そして、ある瞬間には、俳優にならなかったこと、そしておそらく偉大な俳優が私の中で失われてしまったことを非常に後悔した。そして年月ではなく、数十年もの間、私はこの錯覚に浸っていた。コンピューターが登場するまでは。ある日、私は同僚に、実は私は7歳の時から偉大な俳優だと知っていた、しかし母は私に天職を追求することを勧めなかったという話をした。すると同僚が尋ねた：「どんな

詩を読んだんだ？」 私は答えた：「覚えていない」。彼は言った：「せめて詩の言葉をいくつか覚えてるか？」 「うーん、なんかこう... 戦士。ムクドリ...」 そして彼はすぐにその詩を見つけてくれた。アレクサンドル・トヴァルドフスキーの『ムクドリについて』だ。そしてこの話全体が全く異なる光の中で現れた。そして焦点は全く別のところに移った。読んでみようか？

アンナ： もちろん。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 玄関先に戦士が座っている。ムクドリを見つめて不思議がっている： 一何と言っても、ムクドリは正しい鳥だ。朝から晩まで、ここに立っている間、焼け跡の小さな庭で自分のことに精を出している家事にね。自分の巣箱を修理している、長い間放置されていたものを。戦争は戦争だけど、子孫を残さねば！

アンナ（笑う）： あの中央の椅子に座って、人々でいっぱいのホールの中にいるあなたの姿が目浮かぶわ。告白して、白いシャツを着てたんでしょ？...

エゴール・ゲオルギエヴィチ（考えて）： そうだ、7歳の子が白いシャツを着てね。そしてこんな呼びかけ： 「子孫を残さねば！」 戦争の傷も癒えず、まだ荒廃が残り、皆が満足に食べてもいないのに、7歳のガキが「子孫を残さねば！」と叫んでいる。そしてその時初めて、成功の理由は私の才能ではなく、レパートリーにあると理解したんだ。

アンナ（笑う）： 素晴らしい詩よ！ でも、成功は才能のおかげでもあったのよ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： おや、アンナ・アンナ... 君に何がわかる？

アンナ： 私も才能のある人間だと思うからよ。（間を置いて） そう思わない？（間を置いて）

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 確信しているよ。

アンナ： 私は詩人なの。（間を置いて；静かに鼻歌を歌う） 愛と幸運を望み、友人と情熱的な言葉を... 思い出した？

エゴール・ゲオルギエヴィチ： どうして忘れられる？ あれは君の詩だったのか？

アンナ： ええ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 思い出ただけじゃないよ。

アンナ： 私はスターじゃないけど、私の詩にいくつか曲がついてるの。歌われて、人々が聴いてるわ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： じゃあ、なぜタクシーの仕事を？

アンナ： 道が好きだからよ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： ああ、今気づいたんだが、もうほとんど悲しんでいないことに気づいた。あたかも**1300**万ユーロを失っていないかのように...（短い間を置いて付け加える） たったの**1000**万だけだ。君の詩を何か読んでくれないか？

アンナ： いいわよ。（沈黙し、それから少しどもりながら）

偶然の友よ！この優しさはどこから来るの、雲のように私を包み込む？愛のオーケストラ！ヴァイオリンの無邪気な安らぎ、しかしティンパニの音が飛び込み、挑発する。そして管楽器が突然どこかへ誘う、チェンバロが加わり、夢へと誘う…答えよ、おお神よ、私が何を悪くしたのか？教えてくれ、誰が私を欺いたのか？

しかし、私のオーケストラは、どうやら神が創りたもうたもの！そして私は待っている、まさに天から、私の愛しい人よ、そのすべての力が降り注ぐことを！そしてフィナーレが響く 狂おしいワーグナーの力で！

（照れを隠すために、間を置かずに続ける）踊ろうと思ってたの。まだ気が変わってない？

シャパ（近づいて）：ソーセージです。（彼らの前にソーセージ、パン、カトラリーが載った皿を置き、すぐに離れる）

エゴール・ゲオルギエヴィチ（アンナに）：まずは食事にはしないか？

アンナ：まずは踊るわ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（やや戸惑って）：でも…音楽なしで？

アンナ：音楽は私の中にあるわ。

シャパ（カウンターの後ろから）：音楽はトイレの中にあるわ（エゴール・ゲオルギエヴィチに）私と一緒に来て（トイレのドアを指す）このドアの向こうに、偉大な音楽家がいるの。起こして、そうすれば音楽が手に入るわ。

その間、アンナは少し待ってからソーセージを食べ始める。エゴール・ゲオルギエヴィチは丁寧にトイレのドアをノックする。

スヴェートーニイ・ブボラ： 誰だ？

エゴール・ゲオルギエヴィチ（少し間を置いて）： エゴール・ゲオルギエヴィチです。

スヴェートーニイ・ブボラ： 一人ですか？

間。

シャパ： 一人よ、一人よ。

スヴェートーニイ・ブボラ： 帰れ、妻よ。

シャパ： もう帰ったわ（その場に留まる）。

スヴェートーニイ・ブボラ： 帰った？ 本当か？

スヴェートーニイ・ブボラ： なぜトイレのドアに覗き穴をつけないんだ？

...

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 良い質問だ。

シャパ： もう帰ったって言ってるでしょ、帰ったわよ（自分の仕事場に戻る；そこからアンナに投げかける） 美味しい？

アンナ： 最高よ！

シャパ： どうぞごゆっくり。

アンナ： ありがとう。

スヴェトーニイ・ブボラ： 帰ったのか？

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 十分にね。ところで、そちらはどうですか？

スヴェトーニイ・ブボラ： 鳥が歌い、ラベンダーが咲いてる。開けるか開けないか？ それが良い質問だ。なぜトイレのドアにチェーンがないんだ？...

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 一つだけ質問がある： あなたは本当に音楽家なのか？

スヴェトーニイ・ブボラ： 音楽家だよ、それがどうした？

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 仕事を提案する。

シャパ（自分の席から）： いつ？ どこで？ いくら？

エゴール・ゲオルギエヴィチ（彼女に合わせて）： 今。ここで。たっぷり。

シャパ： スヴェティク、出てきなさい！

そしてすぐにドアが開き、スヴェトーニイが出てくる。

スヴェトーニイ・ブボラ： 準備はできてる。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： ありがとう。

二人ともテーブルに戻る。

熟したリンゴの果汁よ、私は恋をしたんだ 勇敢な若者に。

シャパ（アンナの前でタップダンスを踏む）：エイ、リンゴちゃん 岸
辺を転がれ、商品を買ったなら、金を払え。

アンナ（シャパに負けず劣らずのタップダンスで応える）：エイ、リン
ゴちゃん、どこへ転がるつもり？ 悪魔の手に落ちたら、戻れやしない
。

スヴェートーニイ・ブボラ（突然）：エイ、リンゴちゃん、お皿の上で
！ 僕らは戦線に奉仕しに行く！ さよなら、女の子たち！

踊っている間中、踊っている全員がジェスチャーでエゴール・ゲオルギ
エヴィチを輪の中に誘う。最初、エゴール・ゲオルギエヴィチは軽く足
を踏み鳴らし、軽く拍手をし、時々うなずくだけだった。しかし、踊っ
ている人たちの「猛攻撃」に耐えかねて、ついに輪の中に加わる。彼は
抑制された、勇ましい足取りで輪の中に出て、アンナの前に立ち止まる
。アンナも立ち止まる。しばらくの間、立ち尽くし、互いの目を見つめ
る。それからエゴール・ゲオルギエヴィチはお辞儀をしながらアンナの
周りを回り、アンナへの注意と敬意を鮮やかに示す。アンナはエゴール
・ゲオルギエヴィチの動きに合わせて振り返り、その間ずっと目を離さ
ない。シャパは立ち去る。

アンナ（皆に）：さあ、皆さん！ 最後にシャンパンをいただきまし
ょう！ エゴール・ゲオルギエヴィチがグラスにシャンパンを注ぎ、全
員がグラスを合わせ、「明けましておめでとう！」「新しい幸せと共
に！」「すべてがうまくいきますように！」「乾杯！」とそれぞれ叫
ぶ。シャパは残ったソーセージを4等分し、全員がつまみ食いする。

アンナ（ソファに座る）：コーヒー一杯のために王国の半分を差し出

してもいいわ！ スヴェトーニイ・ブボラ： 同感だ！ もう24時間近く立ちっぱなしだ！ シャパ： 私はこれらの機械を直す方法がわからないの、わからない！ スヴェトーニイ・ブボラ（シャパに）： コーヒーがなくても、せめてお茶くらいは用意してくれないか、妻よ？ シャパ： お茶はできるわ、来て（彼をカウンターに連れて行き、魔法瓶とカップを置く；エゴール・ゲオルギエヴィチとアンナに） お茶は？ アンナ： 私はコーヒーだよ。 エゴール・ゲオルギエヴィチ： コーヒーマシンを直してみよう（コーヒーマシンに近づく）。 シャパ（遠くから）： 説明書が要りますか？ エゴール・ゲオルギエヴィチ： もらおう。

シャパが説明書を持ってくる。エゴール・ゲオルギエヴィチはめくりながら「まずは診断だ...」とつぶやく。シャパはスヴェトーニイ・ブボラのところには戻らず、アンナの隣に座る。アンナはゆっくりと普段着に着替える。

シャパ： なかなかいい新年になったわね。あなたは思う？

アンナ： いいわね。

シャパ： 私が夫と、あなたが夫と、いい仲間だったわね。気分もいいし。あなたはどう？

アンナ： いいわよ。

シャパ： 謝りたかったの... 変に思わないで...

アンナ（彼女の手に分の手を置く）： 思っていないわ。

シャパ： まあ、要するに... 私が欲張りだと思ったかもしれないわね。

アンナ： 思っていないわ。

シャパ： 私は欲張りじゃないの。ただ、一銭一銭を大切にしてるだけ。

アンナ： わかるわ。

シャパ： 私は全力で稼いで、全力で貯めてるの。自分には何も許さずに。

アンナ： じゃあ、あなたにとってとても価値のある何かのために貯めてるのね。

シャパ： どうしてわかったの？！

アンナ： わかったのよ。

シャパ： その通りよ。私の人生で一番価値あるもののために。でも、何かは言わないわ。ジンクスが怖いから。聞かないでね。

アンナ： 心配しないで、聞かないわ。

シャパ： 聞かないの？

アンナ： 聞かないわ。

間。

シャパ： でも聞いてよ！

アンナ： 聞くの？

シャパ： 答えたいのよ！

アンナ（着替えをやめてシャパを見る）：聞くわ。あなたの人生で一番価値あるものは何なの？ただ聞くだけじゃないの、私にとって大事なことの。とても大事なこと。

シャパ：私のことをバカだと思わない？

アンナ：何を思うかは、先にはわからないわ。

シャパ：それでもいいわ！我慢するから。誰かに話したいの。

アンナ：じゃあ、ただ話してごらん。

シャパ：子供の頃、一番好きなおとぎ話は何だったか知ってる？

アンナは黙って待つ。

シャパ（続ける）：死んだお姫様の話よ。

アンナ：不思議ね！

シャパ：どうして？

アンナ：私も同じだからよ。

シャパ（嬉しそうに）：じゃあ、あなたは「私の」人ね、そして全部わかってくれる！

アンナ：必ずわかるわ！話して！

シャパ：想像してみて！2世紀か、あるいは3世紀前、カフカスの山々のどこかで、小さなクリスマスツリーが生まれたの。ツリーはただのツリーだった。そしてそれはただ育っていった...

そして周りには誰もいなかった。何世紀もの間、誰もいなかったの、想像できる？ でもそのツリーは特別だった、でもそれに気づく人は誰もいなかった。想像できる？

アンナ： 悲しいわね。

シャパ： そのツリーは完璧だった。周りのどんなツリーとも比べ物にならないほど。想像できる？ ひび割れも、欠点もなかった。私が何を言いたいかわかる？

アンナ： わかるわ。話して。

シャパ： **100**歳になるまで生き延びたけど、誰もその美しさに気づかなかった。

アンナ： 悲しいわ。

シャパ： そしてある日、山で一番強い嵐が起こったの！ 私たちのツリーは根こそぎにされ、深い川に投げ出された。

アンナ： とても悲しいわ。完璧でありながら、誰にも気づかれずに生きるなんて。

シャパ： そしてそれは冷たい水に覆われて、川底に横たわっていた。

アンナ： 死んだお姫様ね？

シャパ： そしてさらに**100**年が過ぎた... あなた、泣いてるのね、アンナ。

アンナ： 気にしないで、話して...

シャパ：でも、見つかったの！ある天才的な職人に。魔法使いに。私たちのトウヒは引き上げられ、乾燥させられ、そして慎重に、優しく、薄い板に切り分けられた。

アンナ：話して...

シャパ：職人はそれぞれの板を丁寧に叩き、その振動を聴いた。そしてついに誰かが、このトウヒが完璧であることを理解した。そして、トウヒが冷たい川の底で眠っている間、ここから遠く離れた別の山々で、小さな、

かすかに見える、細い茎が、二枚の薄緑の葉をつけて生まれていた。

アンナ：人生は悲しいものね。

シャパ：いつもじゃないわ！カエデは気づかれ、私たちの偉大な職人・魔法使いも気づいた。そしてこのカエデにはこの地上で高い使命があると理解した。職人はカエデの木片を持ち帰り、器を彫り始めた。あなたはドムラのボディに見とれたことはない？

アンナは黙っている。

シャパ（ドムラを持ってくる；途中で、コーヒーマシンをいじり続けているエゴール・ゲオルギエヴィチに）：どう？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：あまり良くないな。廃棄トレイは空だ、大丈夫。ドリップトレイはきれいだ、空だ、これも大丈夫。コンセントは生きている。サージプロテクターも大丈夫だ。

シャパ（アンナに向かいながら、エゴール・ゲオルギエヴィチに元気よく）：壊さないでよ、私の給料から引かれるから。

スヴェトーニイ・ブボラ（まだお茶を飲み続けている；エゴール・ゲオルギエヴィチに気遣って）：もうやめにしなよ... こっちに来て、お茶を飲もう。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（手を広げて）：連れ合いがコーヒーを欲しがってるんだ（マシンをいじり続ける）。

シャパ（アンナの前にドムラを置く）：これがドムラよ。これがボディ。ご覧の通り、半球形ね。

アンナ（見る）：ええ。

シャパ：このカエデの木材は波打つような、きらめく木目だったの。木材自体が芸術作品だった。そして職人はそこから完璧なボディを作り、側板を曲げ始めた。

アンナ：側板？（笑う）

シャパ（アンナに見せる）：これよ。側板。

アンナ：側板。素敵ね。

シャパ：そしてもちろん、音よ！人間の声に似た音（ほとんど囁くように）私の夢は、私のスヴェティクがこんなドムラを持って、本物の大きなオーケストラで演奏すること。そして、彼の演奏がどれほど素晴らしいか、みんながやっと気づくこと。彼の演奏は完璧なの。そして、それが私にしか見えていないのがとても辛い。

アンナ： 私は彼の演奏を評価したわ。

シャパ： ありがとう。（別の口調で） こんなドムラはだいたい2万ドルするの。もう3年以上貯めてるわ。自分を追い込み、彼を追い込んできた... でも、いつか私のスヴェートーニイがこんなドムラでオーケストラで演奏し、私が一番前の席に座って、彼と彼のドムラを誇りに思う日が来ると信じてるの。

アンナ： そして自分自身もね。

シャパ： ありがとう。

アンナ（しばらく黙って）： あなたを羨ましく思うわ。夢を持てることじゃない、その夢が必ず叶うということよ。

シャパ： あなたは、鐘の音と共に願い事をすれば叶うと信じる？

アンナ： 信じるわ。

シャパ： 私は、新年が明けたらすぐに、すぐに叶いますようにって願ったの。

アンナ： これが私の名刺よ。叶ったら電話して、一緒にお祝いしましょう。

シャパ： 必ず！（彼女に自分の名刺を渡す） あなたも私に電話してね。私があなたの名刺をなくすかもしれないから。

アンナ： 連絡するわ。でも、夜が明け始めたわね。（呼びかける） エゴール・ゲオルギエヴィチ、どう？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：新年の最初の朝をコーヒーで始められる可能性は低いな。

アンナ：じゃあ...行かなくちゃ！探しに行くのよ。

シャパ：何を探してるの？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：まあ、たいしたことじゃないよ... どうやら一番大事なものはもう見つけたみたいだ（近づき、アンナにコートを手渡し、自分も着る）。

シャパ：あなたたちが去るのがちょっと寂しいわ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（テーブルにお金を置く）：さあ。ありがとう。なかなかいい新年を迎えられたと思う。

アンナ：素晴らしいわ！でも、今は携行缶を忘れないことが大事ね。

シャパ（お金を手に取り、見る）：これは多いわ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：受け取ってくれ、心からだ。

シャパ：受け取るわけにはいかないわ...

アンナ：受け取って。

エゴール・ゲオルギエヴィチが携行缶を持ち、アンナが自分の荷物を取って、出口へ向かう。スヴェトーニイは同じ場所にいる。うたた寝している。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（シャパに）：ご主人が眠ってしまったな

...

シャパ：いいわ、起こさないで。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：彼に、大きな感謝の気持ちを伝えてくれ。

アンナ：私からも。

シャパ：伝えるわ。探し物がうまくいきますように。（彼らの後ろに向かって）アンナ、コーヒーの件、ごめんなさいね。

アンナ（笑う）：気にしないで。幸運を祈ってる！

エゴール・ゲオルギエヴィチとアンナは外に出る。吹雪はおさまった。
シャパは考え込んだまま立ち尽くす。

アンナ（外でエゴール・ゲオルギエヴィチに）：これが私の人生で一番の新年よ。（クリスマスツリーを見る）さよなら、クリスマスツリー。
あなたも完璧かもしれないわね。（エゴール・ゲオルギエヴィチに）一周して、お辞儀をしてお別れをしましょう。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：あなたが詩人だと確信したよ。

アンナは笑い、彼の手を取る（彼は携行缶を置く）、そして二人はゆっくりとクリスマスツリーの周りを回る。

アンナ（突然立ち止まり、ツリーの下を見る）：おお、神様！サンタクロースがクリスマスツリーの下にプレゼントを置くって、私は確かに信じてるわ！私たちへのプレゼントは確かに置いてあったわね。

エゴール・ゲオルギエヴィチ（同じ場所を見る；呆然として）：見えるよ。

二人はバッグをツリーの下から引き離す。立ち尽くし、それを眺める。

アンナ（バッグを触る）： どうやら... 詰まってる... どうやら... あなたの全額の紙幣（皮肉を込めて） 500ユーロと200ユーロがすべて残ってるわね。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： それにダイヤルロックも無傷だ。（バッグの上に座る）

アンナ： 無傷ね（バッグの反対側に座る）。

こうして二人は背中合わせに座り、黙っている。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： こんなことってあり得るのか？

アンナ（確信を持って）： 決してあり得ないわ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 信じられない。

アンナ： 私も信じられないわ。つまり、5時間前までは見つかるって信じてたけど、今は信じられない。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 私は信じてなかった。でも、今は信じ始めてる。

座って黙っている。

シャパがコーヒーマシンに近づき、独り言をつぶやく：「どうしちやっただの、あんたは？ 掃除プログラムを実行してみようかしら。バカみたいだけど、試してみるわ」。起動する。

エゴール・ゲオルギエヴィチとアンナはまだ座って黙っている。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：つまり、この金のことを今は誰も知らないということだ。知っている者は黙るだろう。

アンナ：どこかに届け出られるかしら？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：なぜだ？ どこへ？

アンナ（漠然と）：まあ、どこかへ。拾得物を届けるところへ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：そんなことをしたら、すぐに警察が来るだろうな。そして、私の素性が明らかになり、あの連絡先が明らかになり、この金が誰のものか、どこから来たのかを調べ始めるだろう。そうなれば、私の人生で起こったすべてを否定することはできなくなる。公判、収監、おそらくは...（身震いする）いや、そんなことはできない。アンナ：それなら、誰にも言わずに、自分たちでどうにかできるか考えてみては？ エゴール・ゲオルギエヴィチ：誰にも言わずに、どうやって？ アンナ：ゆっくり使えばいいのよ。隠して。十分すぎるほどあるわ。エゴール・ゲオルギエヴィチ：お金は使うためにあるんだ。それに、私はこれまでずっと、金のためなら何でもする連中に囲まれて生きてきた。私自身も金の虜だったんだ。しかし今...（短い間）私の人生で初めて、この金を見ているけど、何の欲望も感じない。アンナ：それは素晴らしいことだわ、あなたはそれから解放されたのよ！ エゴール・ゲオルギエヴィチ（突然）：知ってるか？ 道端に置いておくのがいいかもしれない。善人が見つけて使うだろう。アンナ：それじゃあ、あなたと私は善人じゃないの？ エゴール・ゲオルギエヴィチ：そうだな。でも、善人になるのは遅すぎる。アンナ：決して遅すぎることはないわ。エゴール・ゲオルギ

エヴィチ： どうやって？ アンナ： まずはその金を、その金が誰のも
のでもない場所に置くの。そして、誰も持っていかないことを願う。
それで私たちは善人になれる。 エゴール・ゲオルギエヴィチ： 考え
たことがある。しかし、バッグを手放したら、自分が真っ裸になった
気分になるだろうな。しかし、あのバッグさえなければ、自分で決断
できる、決してこの金の奴隷にはならないと。しかし... だが... 私はま
だ準備ができていない。（間） それでも、まだそうする勇気はない。
アンナ： それなら、また後で考えよう。まずはみんなを家に送り届け
ること。あなただって車を止めるわけにはいかないし。 エゴール・ゲ
オルギエヴィチ： 君は賢い女性だ、アンナ。 アンナ： 私は詩人でも
あるのよ。 エゴール・ゲオルギエヴィチ： 確かに。さて、行こう。
ただ、どこへ行けばいい？ アンナ： まずはそのバッグを車に積ん
で、それから... それからあなたをパラダイスに連れて行くわ。それか
ら私は家に帰るの。そう決めたわ。 エゴール・ゲオルギエヴィチ：
パラダイス？ もうパラダイスは必要ないかもしれない。 アンナ（理
解したように）： 本当に？ エゴール・ゲオルギエヴィチ： ああ。あ
なたと過ごしたこの数時間は、まさにパラダイスだった。それで十分
だ。 アンナ： それなら、私たちの新しい人生を始める時ね。二人は
立ち上がり、バッグを持って、ゆっくりと車へと歩いていく。する
と、どこからともなく、あの有名なシャリヤーピンの声が聞こえてく
る：

そして天からのシャリヤーピンの声：

人々は金属のために死ぬ、人々は金属のために死ぬ、サタンがそこで
舞踏会を主宰する、そこで舞踏会を主宰する。

アンナ（不安そうに）：今、何を考えてるの？

エゴール・ゲオルギエヴィチ：本当のことを言うか？

アンナ：そうしてほしいわ。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：君は信じないだろうな。私たちはこんなに親密なことを打ち明けるには、知り合って日が浅すぎる。

アンナ：すぐに打ち明けなさい。

エゴール・ゲオルギエヴィチ：私は考えている...（間）

アンナ：言って！

エゴール・ゲオルギエヴィチ：私は考えている...（間）

アンナ：エゴール・ゲオルギエヴィチ！

エゴール・ゲオルギエヴィチ（決心して）：私は考えている... 君のために一杯のコーヒーなら**100万ユーロ**を払ってもいいと思っている。

彼らは小道を有料道路の方へ歩いていく。

その間に...

シャパ（コーヒーマシンのそばで）：どうやら、掃除を実行するだけでよかったみたいね。

スヴェートーニイ・ブボラ（突然飛び起きて叫ぶ）：シャパ！ シャパ！
妻よ、どこにいる？！

シャパ（彼のところに駆け寄る）：スヴェティク！スヴェティク！何か夢を見たの？ 私たちはガソリンスタンドにいるわ。明けましておめでとう、大丈夫よ。

スヴェートーニイ・ブボラ（何かオペラのような口調で）：夢だ！全部思い出した！シャパ、私たちは大丈夫だ！自分の稼ぎをどこに置いたか思い出したよ！ここに引きずってきたあのバッグのサイドポケットに突っ込んだんだ！

シャパ：バッグはどこ？

スヴェートーニイ・ブボラ：すぐそこだよ、ツリーの下に。（ツリーに走るが、バッグはない；辺りを見回すが、周りには誰も何もない；頭を抱える）決して、決して女性が怒っている時にその言うことを聞いてはいけない！決して！なぜ彼女の言うことを聞いたんだ？なぜバッグを手放したんだ？

しばらく頭を抱えて立ち尽くし、それから何とか立ち直り、オペレーター室に戻る。入る。シャパはコーヒーマシンのそばにコーヒークップを持って立っている。

スヴェートーニイ・ブボラ（自分を抑えようとするが、それでもかなり暗い口調で）：シャパ。悪い知らせがある。バッグが夜の間にツリーの下から持ち去られた。そしてもう二度と、俺たちは俺の年末年始の給料を見ることはないだろう。

シャパ（彼女にとって驚くほど無頓着に）：私には素晴らしい知らせがあるわ、スヴェティク！コーヒーマシンを直したの。そしてこれがあなたのコーヒーよ。新年最初一杯。幸運に乾杯！

スヴェトーニイ・ブボラ（コーヒーをすする）： 新年をコーヒーで始めるのは、きっといい兆しだ。そして、私たちはいい人たちと新年を迎えた。つまり、一年中、私たちの周りにはいい人たちだけがいるってことだ。これも確かな兆しだ。

シャパ： そうね。素敵なカップルだったわ。一生一緒に暮らしてきたのがわかるわ。

スヴェトーニイ・ブボラ： もう二度と会えなかったら残念だな。シ

ャパ： かもしれないわね。（考えて） いや、会えるかもしれない！

スヴェトーニイ・ブボラ： アンナはあんなにコーヒーを飲みたがってたのに。（しばらく考え込む） 彼らが出て行ってからどのくらい経

つ？ シャパ： 15分くらいかしら。スヴェトーニイ・ブボラ： じゃあ、まだ出発してないはずだ。給油して、エンジンをかけるのに時間がかかるから。シャパ（素早く理解して）： もう準備してるわ！

（コーヒーを準備する） スヴェトーニイは急いで身なりを整え、サンタクロースのコートを着る。シャパ（彼に紙の蓋つきカップを差し出す）： コーヒーを持って行って！ そして走って、スヴェティク、走って！！！ 間に合わなきゃ！ スヴェトーニイ・ブボラは小道を走

る。片手でコートの手を掴んで走りの邪魔にならないようにし、もう一方の手にはコーヒーカップを握りしめて高く掲げている。有料道路で、アンナとエゴール・ゲオルギエヴィチ。携行缶もバッグもない。

エゴール・ゲオルギエヴィチ： 「さあ、行こう」と言うべきなんだろうけど、どこへ行けばいいのか... わからない。アンナ： じゃあ、ただ立っていきましょう。エゴール・ゲオルギエヴィチ（心配そうに）：

顔色が悪いぞ。気分が悪いのか？ アンナ： 血圧が下がったの... すごく

めまいがする。今、一杯の熱いコーヒーがあればいいのに。スヴェト
ーニイ・ブボラ（走って彼らに近づき、カップを振り回しながら）：
アンナのためのコーヒー！ アンナのためのコーヒー！

[ファイル内容終了]